オカシナ村の好きな夢

くまミニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オカシナ村の好きな夢

【Ｎコード】
Ｎ４７６５Ｃ

【作者名】
くまミニ

【あらすじ】
ユウタはどこにでもいる、ふつうの男の子です。ただ、オカシナ村に行くことができる…えぇ、そこだけがサトミとは違うんです。これからしてくれるおはなしも、そんなユウタがしてくれた『夢』のおはなしです……

『はじまりのおはなし』のはじまりのおはなし

これからするおはなしは、ユウタが小学2年生だったころのおはなしです。

…えぇ、ユウタのことを、ちょっとだけ、おはなししておいたほうがいいかも知れません。

でも、ユウタはどこにでもいる、ふつうの男の子なんです。

ただ、オカシナ村に行くこともできる…えぇ、そうですね。これは、ふつうの男の子にはできません。おとなりに住んでいる、サトミにだってできないんです。ですから、いつも、ユウタはマリちゃんやメグちゃんからもうらやましがられています。

これからするおはなしも、そんなユウタがしてくれた『夢』のおはなしです。どうして『夢』なのかは…ちょっとだけ、待っていてください。ちゃぁんと、ユウタが教えてくれると思います。

……それでは、『はじまりのおはなし』をはじめましょうか。

1．はじまりのおはなし

とってもおおきな夏の空に、まっ白い雲がモコモコとならんでいます。

きょうで、ちょうど、夏休みも半分になってしまいました。そろそろ、宿題のことも考えなくちゃいけません。ほんとうに、ウンザリ、です。

でも、もちろん、やっぱり、宿題はしなくちゃいけませんから…

朝から、サトミは机にすわってノートをめくっていました。

「おいっ！」

その時、急におとなりから、ユウタくんの怒った声が聞こえてきたんです。

「……？」

「どうして、バラバラにしたんだよ！」

ユウタくんは、めったにどなったりしません。サトミはびっくりして、窓からおとなりをのぞきこみました。

でも、ダメです。部屋からは何も見えません。

ユウタくんの怒った声は、次から次へとポンポン外に飛び出してきます。

「…！」

あれは、マリちゃんの泣き声です！

もう、宿題なんてしていられません。

サトミは、すぐにユウタくんのお家に向かって走りはじめていました。

……

えぇ、そうです。

その時、ユウタはほんとうに、とっても怒っていました。

三つになったばかりのマリちゃんが、目の前でしくしくと泣いています。悲しそうなマリちゃんのまわりには、きれいなジグソーパズルがちらばっていました。
あっちにも、こっちにも…
ユウタは、このパズルをもう何日もかけて作りつづけていました。
こんなにおおきなジグソーパズルは、はじめてです。あと、もうすこし…ほんとうに、あと、もうすこしで、できあがるところだったんです。
…白くてまぶしいお家のかべに、木や柱のかげがくっきりと見えていました。そのお家の前には、ちいさな女の子がぼうしをかぶって、せなかを向けて立っています。
それは、ほんとうに、とってもステキなパズルでした。
でも…でも…
もう、いまは、女の子の絵のまわりしか、のこっていません。マリちゃんがそこを手にしてふりまわしていたところに、ちょうど、ユウタがもどってきたんです。
…ダメです。どうすれば、いいんでしょう。
バラバラになったパズルを見ると、また、どなってしまいそうです。
「出ていけよ！」
そう言うのが、せいいっぱいです。
「はやく、部屋から出ていけ！」
ちいさなマリちゃんは、わんわん泣きながら、部屋からとびだしてしまいました。

ユウタだって、泣きたい気分です。
たったひとりで、ずっとがんばってきたのに…
もう、きっと、元どおりにできません。
…がっかりしながら、ユウタはすわりこんでしまいました。

……真夏のあかるい光が、あちこちにちらばるパズルの破片を照らしだしています。
いつもはあんなにもうるさいセミの声だって…なんだか、しずかに……遠くに思えます……

「マリのせいで…！」
「……おこらないで…」
つぶやいたユウタの耳に、やわらかな女の子の声が聞こえてきました。
…おとなりのメグちゃんでしょうか？　でも、さっき、メグちゃんはおばちゃんといっしょに、お買い物に出かけたはずです。
「……？」
だったら、だれなのでしょう…

「あの…ここ、なの…」

はにかんだ、ちいさな声がすぐそばから聞こえてきます。
きょろきょろと見回しても、でも、だれも…
……あれ…？
すぐ目の前で、ジグソーパズルの中の女の子が、顔をこちらに向けています。さっきまでは、ちゃんとせなかを向けてたっていたのに…

「…おねがい…」

えぇ、その絵の中の女の子が、ユウタを見ながらそっとお話しているのです。
「…えっと、…その…マリちゃんを、おこらないで…」
「ど、どうして…」
さすがのユウタも、ジグソーパズルの女の子に話しかけられて、

びっくりしてしまいました。
だって…ねぇ？
「あの…マリちゃんが、パズルをばらばらにしてくれたから……だから、その…わたしの魔法も……」
「魔法？」
「…うん。…ばらばらにしてもらえたから、わたし…こうして、お話できるように…」
「じゃぁ、ばらばらにならなかったら…」
「もう、ぜったい…お話なんてできなくなって……」
「へぇ…そうだったんだ」
もう少しで、ユウタはこのちいさな女の子を本当の絵にしてしまうところだったんです。
マリちゃんのおかげで、女の子の魔法がとけたんです。
「ごめん、知らなくって」
「…ううん、…しかたないもの。
でも…ね？　…その…もう、マリちゃんをおこらないで……」
「うん、約束するよ」
ユウタは大きくうなずきました。
えぇ、もう、本当にユウタはマリちゃんのことを怒っていなかったんです。
「よかった…ありがとう。
…じゃぁ、ね……ばいばい」
にこにこしながら、絵の中の女の子は手をふってくれています。
胸の前でちいさく手をふる、そのかわいいしぐさが…あれ？　なんだか、サトミみたいです。
男の子みたいに自分のことを「ボク」なんていうサトミも、こんなしぐさをするときだけは、ちゃんと女の子みたいなんです。
…ぼんやりと、そんなことを考えていたら……

いつのまにか、ジグソーパズルの中の女の子は、どこかにいなくなってしまっていました……

……

「なによ！　ボクは女の子だよ！」
マリちゃんをなぐさめていたサトミは、ぷんぷん怒ってしまいました。
だって、ねぇ？　せっかく、心配になって来てあげたのに…
「あぁ、だから、『男の子みたいに』としか言ってないだろ？」
ユウタくんったら、そんなことを言うんです！
ヒドイと思いませんか？
すっかり怒ってしまって、サトミはぷいっ！　と横をむいてしまいました。
…でもね、本当は、ユウタくんのおはなしが聞けて、ちょっぴりうれしかったんです。
ユウタも、そんなサトミに気がついていました。オカシナ村のおはなしを、一番おもしろがってくれるのは、サトミなんです。
でも、それはユウタにとって、とても不思議なことでした。
だって…サトミは力も強くって、ケンカになったらユウタと同じくらい、こわぁ～い女の子なんです。そんなサトミが、おはなしが好きだなんて…ユウタには、まだよく分からなかったんです。
横をむいて怒ったフリをしているサトミに、ユウタはにやっと笑ってみせました。
「ほら！　もう、泣かなくていいんだよ」
そう言って、マリちゃんの頭をくしゃくしゃにしています。
「マリのおかげで、あの女の子の魔法がとけたんだからな」
「…うん！」
にっこりと、マリちゃんもうれしそうに笑っています。
そんなマリちゃんをちらっと見て、ほっとしながらサトミはユウ

タくんに顔をむけました。
「ねぇ、ユウタくん。そのジグソーパズル、みんなで作ろうよ」
「へぇ、いいのか？　宿題はどうするんだよ」
「あっ…う…」
…えぇ、そうです。ついさっきまで、サトミは夏休みの宿題をしていたんです。
「まっ、いいか。一日くらい、なんとかなるよな」
そんなことを言って、ユウタくんは立ち上がっています。
もう！　本当に、イジワルなんですから。
部屋に走っていくユウタくんに向かって、サトミはかわいく舌をつきだしていました。

……

「だから、オカシナ村にあるこのパズルには、もう女の子がいないんだよ」
ユウタはきれいな夕日の当たる縁側で、サトミやマリちゃん、そしてお買い物から帰ってきたメグちゃんといっしょにジグソーパズルを作りながら、そう言いました。

きっと、もうすぐ、パズルはできあがるでしょう。
ちいさな女の子がせなかを向けて立っている、ステキな絵のジグソーパズルが。

『はじまりのおはなし』おわり

2．魔法のパンのおはなし

その日、ゆっくりとユウタはペダルをこいでいました。
楽しそうに、口ぶえをふいています。
えぇ、ついこのあいだから、ユウタは口ぶえをふけるようになりました。きちんとメロディにのせて口ぶえをふけるのは、まだクラスでもユウタだけです。ちょっぴり、じまんです。
いつもと変わらない景色の中を、自転車は走っていきます。
きょうは、おおきなサカイ川をわたって、ずっと山のほうまで行かなくてはいけません。
土手から下をのぞくと、水がきらきらと光っています。春になったばかりですから、まだまぶしくはありません。なんだか、とってもあたたかくて…やわらかいんです。
やさしい風と、きれいな光…やっぱり、春がいちばんです。
…でも、きっと、夏になれば、夏がいちばんだ、って思うかもしれません。
困ったものです。
走っていくうちに、どんどんと土手は高くなっていきます。
いつのまにか、川の水も見えなくなってしまいました。
まだ葉っぱの出ていない木が、どんどんとまわりにふえてきています。
もうすぐ、たくさんの木にかこまれた池が、左の方に見えてくるはずです。そこまで来れば、マサシくんのお家は、すぐそこです。
「あれ？」
…なんだか、おかしな気分です。
前に来たときよりも、まわりがずっと明るくなった気がして…
「あぁっ！」
思わず、ユウタはおおきく叫んでしまいました。
川からはなれて、左にまがったとき、見えたんです。

ギラギラとまぶしく光っている、いくつものおおきな鉄板が。
その向こうにあるはずの池のまわりには、もう、ちっとも木がありませんでした。
自転車をとめて、ユウタはちょっとぼんやりとしてしまいました…
おかしなものです。池のまわりをかこんでいる鉄の板には、きれいな空と森の写真がおおきく描いてあります。
でも、そのすぐわきには、おおきな木の切り株が、ごろんと転がっているんです…
お昼をすぎたばかりの、やわらかな春の日ざしに照らされて…その切り株は、とっても痛そうな切り口を見せていました。
…なんだか、悲しくなってしまいます。
いいえ。
なんだか、とっても…とーっても、怒っているのかもしれません。
マサシくんに聞いたことがあります。
この池には、たくさんの木といっしょに、たくさんの鳥も集まっていたんです。
きれいなオレンジ色の飾りをつけたキジバトに、とってもすばやいツバメ。
いつもいそがしそうなセキレイや、さわがしいヒヨドリ。
はずかしがりやさんのジョウビタキに、マイペースのツグミ。
かわいいエナガにシジュウカラ、メジロだってたくさんいました。
もっともっと、ユウタが名前をしらない鳥もいっぱいいたんです。
…でも、その池は、もうすっかり埋められてしまっていました。
遠くから鳥が帰ってきても、もうここにはお家がないんです。
土の下になって、魚だっておぼれてしまったんです。
魚が、おぼれるなんて…
なんだか、くやしくなってきました。
でも…見えているのに、何もできていない自分に、いちばん怒っているのかもしれません。
きっと、サトミなら、プンプン怒りだして…

「どうしたの？　ユウタくん！」
きゅうに、そのサトミ本人の声が聞こえたので、ユウタはびっくりして飛び上がってしまいました。
ふりかえると、サトミが赤い自転車をおしています。
偶然（…でも「偶然」って何でしょうね）、サトミもこの近くに遊びに来ていたみたいです。
びっくりしたものの、ユウタが口を開きかけたとき、先にサトミは池のようすに気が付いてしまいました。
「えぇ？　なに、これ！」
ほら…やっぱり、プンプン怒りだしてしまいました。
「ひどいっ！　こんなこと、ボクが絶対ゆるさないんだから」
そんなことを言っています。
「許さないって…」
そう言いかけるユウタを気にもとめずに、サトミは自転車の前かごにあるリュックから、丸いパンを１つ取り出しました。
「サトミ！　それって」
えぇ、もちろん、ユウタはそのパンが何か知っていました。
それは今日、オカシナ小学校の魔法実習の時間に焼いた、魔法のパンなんです。ユウタのパンは失敗してぺちゃんこになってしまいましたが、勉強が良くできるサトミのパンは、先生が誉めるくらい上手にできたんです。
ですから…えぇ、もちろん、魔法の力も強いはずです。
丸い魔法のパンをちぎろうとしているサトミを、あわててユウタはとめようとしました。
だって、いくら頭のいいサトミでも、もしも失敗したら、だれがサトミのパンの魔法をとめるのでしょう。
少なくとも、ユウタにはできません。えぇ、それはまちがいありません。
でも、サトミはそんなユウタの心配なんて、ちっとも気にしていませんでした。とーっても怒ったまま、勢いにまかせてパクパクと

もう半分くらい食べてしまっています。
「……！！」
きゅうに「何か」を感じて、サトミは食べるのをやめて、残りのパンをポケットにしまいこみました。
ぽこっ！　とサトミの体が、中学生くらいに…いえいえ、今はもう、電柱くらいにまで大きくなっています！
えぇ、もちろん、あの丸いパンは、少しの間だけ、体を大きくしてくれるものなんです。
でも、こんなにも大きくなるなんて…
ユウタが見ている前で、どんどんとサトミは大きくなって、まだ止まりません。サトミの足なんて、自動車くらいになっています。
大急ぎで、ユウタは逃げ出しました。あんな大きな足にふまれるなんて、ぜったいに、イヤです。
遠くから見ていると、サトミは小さなビルくらいになって、やっと大きくなるのが止まったみたいです。
プンプンと怒りながら、大きな指で鉄の板をつまみ上げています。
ベリッ！　ガシャガシャガシャッ！
両手で鉄の板をボールのように丸めているサトミを見て、ユウタはゾッとしてしまいました。
…えぇ、もうぜったいに、サトミを怒らせてはいけません。えぇ、ぜったいに、です。
サトミはその鉄のボールを思いっきり遠くに放り投げました。
どんどんと小さくなるボールを、ユウタはびくびくしながら見送っていました。
巨大サトミは、ダンプカーやトラックまで、つぎつぎと持ち上げては投げていきます。大きな大きなブルドーザーが、青い空の中をキラキラ光りながら飛んでいきます…
ぜったい、ぜったい…ぜぇーったい、もうサトミを怒らせたりしません。えぇ、そうですとも。ぜったい、ぜったい、ぜぇーったい、です。

怪獣みたいに大きなサトミは、今度は池を埋め立てていた土の山をくずそうとしています。
手ですくい上げられた土や岩のかたまりは、あたりに飛び散って、もちろん、ユウタの頭の上にだってふりそそいできました。
「やめろ！　サトミ、やめろって！」
でも、ちっともサトミは聞いてくれていません。きっと、ユウタがここにいることだって、すっかり忘れてしまってるんでしょう。
土の山は、どんどんと小さくなっていきます。
それでなくても、もともと力の強いサトミが怒ってるんです。大きくなったサトミにとって、あんな土の山くらい、あっというまになくなって…
「…？」
ちょっとおかしいな、って気がします。
ユウタは、少しだけサトミに近づきました。
ユウタの目には、サトミが少しだけ小さくなったように見えたんです。
…えぇ、たしかに、サトミは小さくなってきています。
ほら、あんなにも大きかったのに、今はもう、電柱くらいでしかありません。
でも、プンプンと怒っているサトミは、自分が小さくなっていることには気が付いていないみたいです。足もとの土の山を、くずし続けています。
「サトミ！」
もう、サトミは中学生くらいになって…いいえ、次には、いつもと同じ七才の女の子の大きさにもどってしまっていました。
「…はぁ、…はぁ……」
大きく肩で息をしながら、それでもサトミは黒くよごれた手で土をつかんでいます。
「サトミ！」
ユウタの声が聞こえたからでしょうか…ようやく、サトミが手を

止めます。
…でも、サトミは動きません。
ずっと、立ちつくしたままです。
「…サトミ？」
急に、ユウタは心配になってきました。あの魔法のパンは、やっぱり、力が強すぎたんでしょうか。なにか、悪いことがおこっているんでしょうか…
あわてて、ユウタは土の山をのぼりはじめました。
でも、その足音に気がつくと、サトミはユウタから顔をそむけてしまいました…
その時、ユウタはちらっと見てしまったんです。
…きゅっ！　とくちびるをかんで…サトミは、ちょっぴり、泣いていました。
サトミはくやしかったんです。
魔法をつかっても、二年生の自分には池をもとにもどすことも、木を生き返らせることもできないんです。
「……」
ユウタはだまってサトミに背中をむけました。
サトミだって、泣いてるところなんか見られたくないはずです。
でも、少しだけ歩いてから、ユウタは小さくつぶやきました。
「やっぱり、サトミはすごいよ。
サトミは、自分ができることを、ちゃんとやったんだから…
よくがんばったな、サトミ」
聞こえてないかもしれませんが、べつにいいんです。ただ、そうつぶやくしか、ユウタにはできなかったんです。
だって、ユウタ自身は、何もできなかったんですから…
ユウタは振り返りもせずに、さっさと土の山を下りていきました。
たおれていた自転車をおこすと、マサシくんのお家に向かって走りはじめます。

きっと、鳥の声はしばらく聞こえないでしょう。
でも…でも……
「何か」が、きっと。

いいえ。
ユウタには、それが「何」なのか、ちっとも分かりませんでした。

……

「だから、このおはなしも、ここで終わりなんだよ」
夕日が、やさしく縁側を照らしてくれています。そのやわらかな光につつまれながら、ユウタはにやっとわらいました。
「えぇ！」
今年、四つになった男の子たちが、二人そろって不満の声をあげています。ターくんとカズくんです。
「そんなの、おかしいよ。ぜんぜん、終わってないんだもん」
カズくんが口をとがらせています。その横で、おっとりターくんもうんうんとうなずいていました。
「しかたないだろ？　僕も続きは知らないんだから。
でも、明日になったら、もっとおもしろいおはなしがあるかもな」
「ほんとう？」
「あぁ。
…じゃぁ、こうしようか。
カズくんとターくんが、二人でこのおはなしの続きをつくるんだ。僕も、今夜、オカシナ村に行って続きのおはなしを見つけてくるよ。それで、その本当のオカシナ村の続きのおはなしと、二人がつくったおはなしをくらべるんだ」
カズくんとターくんは、顔を見合わせてしまいました。
「…カズくん、つくれる？」
ターくんが、とっても心配そうにたずねています。

だって、おはなしを聞くのはとっても楽しいんですが…まさか、自分でつくるなんて…
「つ、つくれるよ！」
カズくんは、大きくうなずきました。…でも、ちょっぴり、心配そうです。
ユウタはにやにやしながら、そんな二人に言いました。
「今のおはなしは、僕たちだけのヒミツだからな。こんなこと聞いたら、またサトミが怒りだすぞ。
サトミが怒ったらどうなるか…よく分かっただろ？」
「うん…」
「本当に、怪獣みたいになるからな。怒らせないほうがいいんだよ」
「…で、でも、それって、オカシナ村のお姉ちゃんのおはなしなんだよね…？」
ちょっぴり…いいえ、とってもビクビクしながら、ターくんは確かめます。
それでなくても、いたずらを見つけたときのお姉ちゃんは恐いのに…もっと恐くなってしまうなんて、いったい、どうしたらいいんでしょう。
「まぁ、魔法は使えないんだから、大きくなったりはしないよな。
でも、サトミがとっても強くて恐い、ってところはいっしょだよ。今日だって、僕のふでばこをこわしたんだぞ？　おまけに、ものさしやえんぴつまで割ってしまうし」
「えぇっ！」
すっかり恐がってしまったカズくんとターくんに、ユウタは声をひそめてささやきます。
「な、恐いだろ？　今度、いたずらしてるところを見られたら…骨くらい、折ってしまうかもしれないな」
「ちょっと！　なに、それ、ひどいっ！」
きゅうに明るい声が飛び込んできます。それがあんまり急だったので、カズくんとターくんはびっくりして、ユウタくんにしがみつ

いてしまいました。
…えぇ、そうです。あれは、サトミお姉ちゃんの声です。それも、とっても、とーっても怒ってるときの声なんです……
「なぁんだ、聞いてたのか」
えぇ、そうですとも。ちゃぁんと、垣根の向こうで聞いてましたとも。
「せっかく、ふでばこのこと、あやまりに来たのに！」
えぇ、えぇ。そのはずだったんです。
でも、サトミは、その…えぇ、本気で怒っているわけではありません。さっきのおはなしも、おもしろかったと思いますし…でも、でも、やっぱり、ちょっぴり怒りたい気分なんです。
「ボクのどこが恐いのよ！」
そう言って垣根をよじのぼると、サトミはユウタくんのお庭に飛び下りました。
「今、とっても恐いじゃないか」
そんなことを言うんです！　なんていじわるなんでしょう。
「ユウタくん！」
にやっとサトミに笑いかけると、ユウタはお庭に下りて逃げはじめました。
サトミも、すぐにそのあとを追いかけます。
二人がお家のかどをまがって、見えなくなってしまうと…
「うわぁ～！」
そのとたん、ドキドキしているカズくんとターくんの耳に、ユウタくんの悲鳴が聞こえてきました。
「わぁっ！」
すっかり恐くなってしまって…大急ぎで、カズくんとターくんはユウタくんのお家から逃げ出してしまいました。
えぇ、もう、ぜったいにお姉ちゃんにいたずらなんてしません。
えぇ、そうです。ぜったいに、です。

温かな春の日ざしが、そんなみんなを赤くそめてくれています。
ふわぁ…とした空の下を、今はもう、楽しそうに笑うサトミとユウタの声が、ゆっくりと広がっていきました……

『魔法のパンのおはなし』おわり

3．大宮の森のクスノキさま

「…お姉ちゃん……」
小学校から帰ってきたとたん、今にも泣きそうなメグちゃんを見て、サトミはびっくりしてしまいました。
「どうしたの？　カズくんにいじわるされたの？」
いいえ、ちがいます…
今までなぐさめてくれていた犬のタムからはなれると、メグちゃんは何も言わずに、ぎゅっ！　とお姉ちゃんの足にしがみついてしまいました。
「メグ！」
カバンを放りだして、お姉ちゃんはしゃがみこんでくれます。
心配そうに、顔をのぞきこんでくれています…
「…あのね…あのね……」
どうしても、涙があふれてくるんです。
でも、ちっちゃな手でそれをぬぐいながら、メグちゃんはせいいっぱい、声をだそうとがんばりました。
「神さま、って…いないの…？
…あんなに…トモちゃんのこと…お祈りしたのに……」
「もちろん、いるよ。絶対、いるんだからね」
サトミはすぐに、力強く声をかけてあげました。
でも…メグちゃんはいやいやするように、首を小さくふっています。
「…どうして…どうして…
メグちゃんの、お祈り…きいてくれないの…？
…メグちゃんが…悪い子だから……」
「メグ！」
「…どうして…そんなに…いじわるするの……」
「……メグ…」

サトミは、しばらく何も言えませんでした。
…困った顔で、タムを見つめてしまいます。でも、タムはしっぽをふるだけで、答えを教えてくれません。
メグちゃんのことです、きっと、本当に…とっても真剣に、お祈りしたはずです。
…どうして…どうして、神さまはそんなメグちゃんのお祈りにこたえてくれなかったのでしょう。
メグちゃんを泣かせるなんて…たとえ神さまでも、許せません。
…それとも……
やっぱり、神さまなんていないのでしょうか……
本当は、サトミにだって分からないんです。
「…ねぇ、メグ。
何を、お祈りしたの？」
「…あのね…あのね……」
メグちゃんは、しゃくりあげながら…それでも、少しずつ、いっしょうけんめいにおはなししました。

実は、メグちゃんが通う幼稚園に、三日前からトモちゃんが来てるんです。
そのトモちゃんのことで、先生はとっても不思議なおはなしをしてくれました。
…えぇ、本当に、信じられないことです。だって、トモちゃんがきのうまでのできごとを、ぜんぶ、ぜぇ～んぶ、忘れてしまう病気なんだ、って…先生は、そんなことを言うんです！
覚えていられるのは、いろいろな人のお名前だけで…でも、そのお名前だって、本当はどの人のお名前なのか、トモちゃんにはちっとも分からないんです。
今日だって、そうです。『メグちゃん』というお名前が、メグちゃんのことなんだ、って…トモちゃんには分かってもらえませんでした。

昨日、メグちゃんがトモちゃんにおはなししたことも、…いいえ、昨日、幼稚園にいたんだ、って…そんなことまで、忘れてしまうんです！

トモちゃんは、『お母さん』というやさしい人が、いつもそばにいてくれることは、ちゃんと覚えていました。でも…今日は、先生のことを「お母さん」って呼んでいました……

明日になったら、今日のことをぜんぶ、忘れてしまうなんて…おとなりのマリちゃんと遊んだことや、ユウタお兄ちゃんに聞かせてもらった、オカシナ村のおはなしだって…ぜぇ～んぶ、忘れてしまうなんて…そんなのって、ないです！

…とっても、悲しくなってしまいます……

だから…だから、メグちゃんは神さまにお祈りしたんです。

明日になっても、メグちゃんやマリちゃんのことを…いいえ、みんなのことを、ぜんぶ、ちゃんと、トモちゃんが覚えていられますように、って……

…でも、…でも、やっぱり…

トモちゃんは、メグちゃんのことをちっとも覚えていてくれませんでした……

「…『しょーがい』っていうの…？　…頭の中を、痛くしたから…だから……」

病気、なのでしょうか。サトミにだって、よく分かりません。

「でも、メグ…大きな病気やケガなんて、一日じゃなおらないよ」

「…神さまでも……？」

「たぶん、ね」

…どうして、はっきり言ってあげられないんでしょう……

でも、サトミにだって分からないんです。分からないのに…ウソは、つきたくありません。

…なんだか、サトミまで悲しくなってきてしまいました。

「……じゃぁ、…じゃぁ、いじわるじゃないの…？」

「もちろんだよ、メグちゃん！」

急に、ユウタくんの声が聞こえてきたので、サトミはびっくりして飛び上がってしまいました。
いつのまにか、玄関の扉の向こうに、ユウタくんとマリちゃんが立っています。
…えぇ、きっと、そうです。マリちゃんも、トモちゃんのことをユウタくんにおはなししたのでしょう。
「神さまが、メグちゃんにいじわるなんてするはずないだろ？」
大好きなお兄ちゃんの言葉に、メグちゃんは少しだけ顔をあげました。
「…ほんとう……？」
「本当さ、な？　サトミ」
「もちろんだよ！」
大好きな…とっても、とっても大好きなお姉ちゃんとお兄ちゃんが、そう言ってくれてるんです。
メグちゃんは、ほっとして…そっと、はにかみました。
「ねぇ、お兄ちゃん。でも…だったら、どうして、神さまはマリやメグちゃんのお願いを聞いてくれなかったの？」
マリちゃんだって、あんなにお祈りしたんです。えぇ、もちろんです。メグちゃんと、ちゃぁんとお約束したんですから。
「さぁ、どうしてだろうな。
ちょっと、神さまのところに行ってみようか」
「え？」
メグちゃんやマリちゃんだけではありません。サトミだって、そんなユウタくんの言葉にびっくりしてしまいました。
「きっと、マリやメグちゃんのお祈りは、いちばん近くにいる神さまが聞いてると思うんだ。
で、ここからいちばん近くに住んでる神さまって言ったら…」
「…大宮の森の…クスノキさま？」
あの…とっても、とっても大きなクスノキさまでしょうか…
「そうだよ。ほら、メグちゃんもおいで」

「…うん」
メグちゃんだって、あのクスノキさまが『ごしんぼく』って言うんだ、って知っています。えぇ、そうです。だから、あのクスノキさまは神さまなんです。
きっと、メグちゃんのお祈りは、クスノキさまが聞いてくれていたはずです。マリちゃんのお祈りだって、そうです。
「サトミはどうする？」
「ボクも行くよ」
もちろんですとも！
それに…もしかしたら、大好きなオカシナ村のおはなしも聞けるかもしれません。えぇ、サトミはユウタくんのあの夢のおはなしが大好きなんです。
…でも、そんなこと、ユウタくんには言ってません。言えるもんですか。
……でも…もしかしたら……ユウタくんは、知ってるのかもしれません。ユウタくんも何も言わないので、本当は分かりませんが……
でも…でも、ずっといっしょに遊んできましたから…なんとなく、分かるんです。
……えぇ、…分かるんです……

ユウタお兄ちゃんは、一番になって、カズくんのお家とは反対の方向に歩いていきます。
メグちゃんとマリちゃんは、サトミお姉ちゃんに手をつないでもらいながら、ちょっぴり、その後ろできんちょうしていました。
もちろん、お祭りやお正月の日には、二人とも大宮に行ったことはあります。でも、今日は、お祭りでもお正月でもありません。今日は、神さまにだけ会いに行くんです。
なんだか、とってもドキドキしてきます。
…ほら、見えてきました。
クスノキさまの森が、お家の向こうで、モコモコしています。

こんなにもドキドキしてるのに…お兄ちゃんたら、すぐに森の中に入ってしまうんです。
…えいっ！
マリちゃんは、サトミお姉ちゃんにくっつきながら…でも、ちゃぁんと、中に入ることができました。
そうなれば、もちろん、メグちゃんも行かないわけにはいきません。
森の中には、きちんと石が敷かれています。みんなで歩くその道の両わきには、大きな大きなクスノキが、ずっと奥まで並んでいました。
…なんだか、暗くて…夏なのに、涼しくて……
ちょっぴり、恐い気がします。
セミの声だって、あんなにしてるのに…なんて、静かなんでしょう……
「……」
きゅっ！　と…メグちゃんもマリちゃんも、サトミお姉ちゃんの手を強くにぎりしめてしまいました。
「大丈夫だよ。ボクもユウタくんも、ほら、平気でしょ？」
とっても明るく言ってくれるんです。
お姉ちゃんは、なんて強いんでしょう！　やっぱり、お姉ちゃんはスゴイんです。
「お～い！　早く、来いよ」
あれ？　もう、ユウタお兄ちゃんは大宮の中に入っています。
大急ぎ、です。
みんなはいっしょに手をつないだまま、大きな石の鳥居の下を走り抜けてしまいました。
入って右側に、とってもとっても…とぉーっても、大きなクスノキさまが立っています。その太い幹には、小さな白い紙のヒラヒラがくるっと巻かれていました。

クスノキさまの足もとには、光のちっちゃなアワがプクプクとゆれています。そのアワをつかまえたくて、メグちゃんとマリちゃんはいっしょに走り出しました。
そんな小さな二人を、にこにこしながらサトミは見送っています。
そして、しばらくすると、その目をもう一度クスノキさまに向けました。
……本当に、なんて大きいんでしょう。
薄暗い木の影に入り込みながら…そっとうかがうと、ユウタくんもすぐ横でじっとクスノキさまを見上げていました。
その目が、とてもキラキラしています……
サトミには、すぐ分かりました。
…えぇ、そうです。今、ユウタくんはオカシナ村をのぞいているんです…
その時、急にユウタくんは大きな笑い声をあげました。
「お兄ちゃん?」
マリちゃんがびっくりしています。
いいえ、サトミだってびっくりしました。メグちゃんなんて、きれいなまぁるい目をしたまま、まばたき一つしていません。
「あはは、ごめん。ちょっと、オカシナ村のクスノキさまを見てたんだ」
「…オカシナ村の…?」
メグちゃんが、急いで大好きなお兄ちゃんのそばまで戻ってきます。もちろん、マリちゃんもいっしょです。
「そうだよ。それがね、クスノキさまは、マリやメグちゃんにどうかあやまってくれ、って僕に頼むんだよ」
「どうして?」
首をかしげるマリちゃんに、ユウタはにやっと笑って言いました。
「もちろん、お祈りをちゃんと、かなえてあげられなかったからさ」
そしてユウタはもう一度、クスノキさまを見上げました。
みんなも、つられて大きな大きなクスノキさまに目を向けます。

「オカシナ村のクスノキさまはね、今、とってもいそがしいみたいだよ。お正月のたくさんのお願いを、夏のお祭りまでにかなえなくちゃいけないんだ、ってがんばってるんだ。
　でも、そこは神さまだから、ちゃぁんとメグちゃんやマリのお祈りも聞いてたんだよ。ただ、あまりにいそがしかったもんだから、ちょっとだけ、まちがっちゃったんだ」
「…神さま……まちがえちゃったの…？」
　ユウタはうなずくと、クスノキさまから目をはなしてメグちゃんに笑いかけました。
「そうなんだ。『トモちゃんが、みんなのことを忘れないように』じゃなくて、『みんなが、トモちゃんのことを忘れないように』ってね」
「……え？」
　すんだきれいな声に、ユウタはしゃがみこんで、メグちゃんの目をのぞきこみました。
「神さまはね、トモちゃんが昨日していたことを、トモちゃんのかわりにメグちゃんやマリが覚えておくようにしちゃったんだよ。だから、メグちゃんとおはなししたことを、トモちゃんは忘れてしまうんだけど、そのかわりに、メグちゃんにずっと覚えててもらうようにしたんだ。
　トモちゃんが忘れてしまったことを、みんなが少しずつ覚えておくことになったんだよ。ひどい神さまだろ？」
「……」
　…いいえ、…なんだか、そうは思いません。
　だって、トモちゃんが覚えていなくても、みんながトモちゃんのしたことを、ちょっとずつ覚えてるんです。
　…えぇ、そうです。みんなの中には、ちゃぁんと、トモちゃんの『昨日』が残るんです。
　もしも、それさえなくなってしまったら…トモちゃんの『昨日』なんて、はじめからなかったみたいに、みんなが忘れてしまったら

……
「…よかった……」
「え？」
サトミはびっくりして、ユウタくんを見ました。
でも…えぇ、ユウタくんは、そっと笑ったままなんです。
「神さまが、まちがって『みんなも、トモちゃんのことを忘れてしまうように』ってしなくて良かったね」
マリちゃんが、にっこりしています。
その言葉を聞いて、もう一度、サトミはびっくりしてしまいました。
「…そうだよな。じゃぁ、神さまをゆるしてあげようか」
「うん！」
元気に、メグちゃんもマリちゃんもうなずいています。
そんな二人を見て、急にサトミはぽんっ！　と手を打ちました。
「そうだ。ねぇ、アイスクリームを食べて帰ろうよ」
「よぉし。じゃぁ、一番にお店に入った人には、サトミがおごってくれるんだな」
そんなことを言って、ユウタくんはもう走り始めています。
「ちょっと！　そんなこと、ボク、言ってないよ！」
「ほら、メグちゃん！　マリに負けるなよ」
「わぁ～い！」
あっというまに、マリちゃんもメグちゃんも見えなくなってしまいます。
えぇ、もちろん、ユウタは本気で走ったりしません。ちゃぁんと、大宮の鳥居の下で、サトミを振り返って待っています。
「ほら、行くぞ」
「ユウタくんも、お金出してよね」
「分かったよ。けっこう、ケチだな、サトミも」
「何よ！」
そう言って口をとがらせたかと思うと…でも、すぐに、サトミは

にっこり笑いかけてきました。
「ありがとうね、メグやマリちゃんのこと」
こんな時、なんだか急に、サトミが女の子に見えてしまうんです。
それが不思議で…いつも、ユウタはびっくりして……
ちょっと、困ってしまいます。
…えぇ、なんだか、さっきみたいに、おはなしできなくなるんです。
「べつに。何でもないことだろ？」
だから、ちょっと目をそらせてしまうんです。
「…そうだね」
にこっと笑うと、サトミはぱっ！　と走り出しています。
「あっ、ちょっと待てよ！」
「ほらほら！　おいてくよ」
楽しい声が、薄暗い森の下に広がっていきます。
大宮の森のクスノキさまも、そよ風に葉をゆらせながら、そんな笑い声を喜んでるみたいでした。

『大宮の森のクスノキさま』おわり

4．雪の朝のおはなし

えいっ！　とカーテンを開けたとたん…

「うわぁ…」

マリちゃんはびっくりして、目をまぁるくしてしまいました。

ちょっとだけ…息もとめてしまいます…

……だって！

だって…えぇ、そうです。だって、外がまっ白だったんです！

「うわっ、うわっ！」

窓にぺったりと張りつきながら、マリちゃんはぴょんぴょん飛び跳ねてしまいました。

こんなステキなニュースは、早くお兄ちゃんにも教えてあげなくてはいけません。

大急ぎ、です。

「雪、雪だよ！　お兄ちゃん、雪、雪！」

マリちゃんが大きな声で部屋の中に入っていくと、ユウタお兄ちゃんはすぐにベッドから飛び出してきました。

いつもなら、ぜぇ～ったい、日曜日は九時まで眠るんだ、って決まってるのに…こんな時だけは、早起きになるんです。

本当に、おかしなものです。

マリちゃんの声ですっかり目を覚ましたユウタは、あわてて窓辺にかけよると、えいっ！　とカーテンを開けました。

「やった！」

もう春も近いというのに、ずいぶんと降り積もってます。お家の周りは、どこもかしこもまっ白になってるんです。青い空から降り注ぐ光の雨で、その雪は金色にまぶしく輝いていました。

これは、本当に大変なことです。えぇ、すぐにでも、遊びに行かなくてはいけません。

「よぉし、今日は一日、雪遊びだ！」

「わぁい！」
さぁ！　ほら、雪が溶けてしまわないうちに…
大急ぎ、です。
はしゃぎまわっていたマリちゃんは、すぐに部屋にもどるとパジャマをぱっぱとぬいでしまいました。
ちっちゃな手で、いっしょうけんめい、きがえます。…えぇ、もう、四つなんですから。ちゃぁんと、一人できがえることだってできるんです。
ぬぎすてたパジャマを、そのままベッドの上に放り投げてしまいます。
こんなことをするなんて…えぇ、こんなこと、全然、マリちゃんらしくありません。
でも、今日は、マリちゃんにとって特別な日なんです。
せっかく四つになったのに…今年の冬は、今日までぜぇ～んぜん、雪が降らなかったんです。その前の、三つの時の雪なんて……ちぃ～っとも、ちゃんと遊べていませんでした。
でもでも、今日はちがいます。だって、もう、マリちゃんは四つなんです。
えぇ、そうです、もうマリちゃんも大きいんです。ちゃぁんと、雪で遊べるはずです。
お兄ちゃんなんて、もう、待っていられません。
マリちゃんはセーターをうらおもて反対に着たまま、外に飛び出してしまいました。
すぐに、シンッとした…冷たい壁にぶつかってしまいます。でも、でも…そんな寒さだって、なんだか気持ちがいいんです。
目の前にある新しい雪には…まだ、だぁれも足あとをつけていません。えぇ、そうです。このドキドキするまっ白なじゅうたんは、今はマリちゃん一人だけのものなんです。寒いとか、冷たいとか…そんなこと、どうだっていいんです。
とってもドキドキしながら……足を、前に出してみます…

あぁ…どうして、こんなにドキドキするんでしょう……
…さふ…さふ…さふっ…
やわらかくて…でもでも、しっかりとした応えが返ってきます。
……もう一つの足も、出してみます…
なんだか、とってもうれしくて…マリちゃんは、わぁっ！　と、叫んでしまいました。
ちょこちょこと、まだちっちゃな足で走り出しています。
その時、おとなりから、なかよしのメグちゃんが楽しそうにかけだしてきました。
「メグちゃん！」
うれしくてにこにこしているメグちゃんに、マリちゃんは両手で雪をすくうと、えいっ！　とふりかけました。
「きゃ…！」
すきとおった、とっても細い悲鳴が広がります。
でも、いつもはおとなしいメグちゃんも、今日だけはちょっぴりちがいます。
だって…はしゃぎながら、マリちゃんに雪をかけかえしてくるんです。
「え～い…！」
「うわぁ」
両手を前に出して、かからないようにしますが…もちろん、金色の雪のつぶはマリちゃんにもいっぱい降りかかってきます。
いっしょにまっ白になりながら、マリちゃんとメグちゃんは楽しそうに笑い声を上げました。
きゃぁきゃぁとはしゃぎながら、雪のかけっこは続きます。明るい声は、青空にどんどんとすいこまれていきます。
でも…えぇ、でも、今日はまだまだ始まったばかりです。
「マリ！　先に朝ごはんを食べなさい」
遊ぼうとしていたお兄ちゃんをつかまえて、お母さんが呼んでいます。

「えぇ〜」
思わず、口をとがらせてしまいます。
…でも……いいえ、……えぇ、そうです。まだまだ、今日はたっぷりとあるんです。
「…はーい！」
だから、マリちゃんもメグちゃんも、すぐにお家の中に入っていきました。

「雪だるまを作ろうよ！」
大きなサトミの声に、マリちゃんもメグちゃんも「わぁっ！」と両手を上げて賛成しています。
「…よし、そうするか」
ちょっと迷った後で、ユウタもサトミにうなずきました。
本当は、ユウタは雪合戦をしたかったんです。だって、カズくんやターくんと遊ぶときには、いつもそうしていましたから…
せっかく降ってくれた雪で、雪だるまを作るなんて…なんだか、もったいない気がするんです。
…でも、えぇ…今日は、カズくんもターくんもいません。それに、男の子みたいなサトミだったらともかく、メグちゃんには雪合戦はちょっと乱暴かもしれません。
それに、なんといっても、今、ここで遊びを決めるのはマリちゃんやメグちゃんが大好きなサトミなのです。ちゃぁんと、ユウタにはそれが分かっていました。
メグちゃんやマリちゃんは、そのちっちゃな手で、もう雪を丸め始めています。その時、サトミの黒く澄んだ瞳が、ちらっとユウタを見上げてきました。
ちょっとだけ、心配そうな瞳です。
そんなサトミに、ユウタはにやっと笑ってみせました。
さぁ、そうと決めたら、雪だるまを作りましょう。
…どんどん、どんどん…雪のかたまりは大きくなっていきます。

でも、大きくなればなるほど、うまく雪は丸まってくれません。ほら、あそこが少しへこんでいます。…いいえ、今度はほら、ここが飛び出してるではありませんか……

…おなかには、まぁるい小石を埋めこみます。枯れてしまった木の枝で、腕だって付けてあげなくてはいけません。青く深い空に向かって、大きく手が広がります。

その腕の間に、ユウタは雪だるまの頭をのせました。

枝の先で、目や鼻も書きこんでいきます。

…う～ん…なんだか、ちょっと変な感じです。

白く息をはずませながら、ユウタはもう一度、目を書きこみました。今度は、そこに小さな石も入れてみます。鼻もいったん消して、雪でそれらしい形を作ってみます…

……ほぉら、完成です。

ユウタはちょっとはなれて立つと、得意になって自分の雪だるまをながめてみました。

マリちゃんくらいの大きさはあるでしょうか。一人で作ったにしては、なかなかの大作です。

…なんだか、今にも動き出しそうです。

腕が動いて……ほら、口が開いて……

いいえ、その時、ユウタはオカシナ村に行くことを、すぐにやめてしまいました。

だって…いそがしそうなサトミの姿が、急に目に飛び込んできたんです。

見れば、メグちゃんやマリちゃんのかわいらしい雪だるまは、もうすぐできそうなのに…サトミの雪だるまは、どこにも見当たらないんです。

「…お姉ちゃん……」

とっても澄んだ、きれいなメグちゃんの声が呼んでいます。

「サトミお姉ちゃぁ～ん」

マリちゃんの元気な声も聞こえてきます。

これでは、サトミだって自分の雪だるまを作れるはず、ありません。二人を手伝うだけで、サトミにはてんてこまいだったんです。
本当に、乱暴に走り回りながらも、サトミはよく小さな子の世話をします。ずっと見慣れてはいても、ユウタはそんなサトミの姿が不思議で仕方ありませんでした。あんなに力が強くて…あんなに恐いのに……
「…よしっ！」
ユウタはしばらく考えこんだ後で、急に大きくうなずくと、もう一つ、雪だるまを作り始めました。マリちゃんやメグちゃんに負けないように、大急ぎです。
「わぁい！」
二人のうれしそうな声が、冬空に響き渡ります。その声が青い空に吸い込まれていった、ちょうどその時、ユウタも二つ目の雪だるまを作り終えていました。
始めに作ったものよりも、ちょっとだけ、大きいかもしれません。…それに、二回目なので、なんだか形だってととのってる気がします。
……えぇ、二つ目の雪だるまのほうが、上手にできてるんです。ほんのちょっぴり…ユウタは、この二つ目の雪だるまを、自分のものにしようかな、と思っていました。
……だって、作ったのは自分なんです。よくできたほうの雪だるまを、自分のものにしても…構わないと思うんです……
「すごぉ～い！　ユウタくん、二つも作ったんだ」
とっても感心している、サトミの声が聞こえてきます。…えぇ…心から、感心してるんです……
その声を聞いたとたん、ユウタは心を決めました。
目を大きくしているサトミを振り返って、ユウタはにやっと笑うと、首を振りました。
「ちがうんだよ。こっちの、二つ目のほうはサトミのものなんだ。そのつもりで、作ったんだからな」

その言葉に、ますますサトミの目は大きくなってしまいます……
…なんて、きれいな目なんでしょう。…えぇ…今まで、ちっとも知りませんでした……
サトミは四つの雪だるまの中で、一番大きくてステキなものを見つめた後、確かめるようにもう一度、ユウタの目を見てきます。
その視線から目をちょっとそらせながら…ユウタはそれでも、ちゃんと、うなずきました。
そのとたん、ぱっとサトミの顔にうれしそうな笑みが広がりました。
「ありがとう！」
本当にうれしくて、はずんだサトミの声に、マリちゃんもメグちゃんもはしゃいでいます。なんだかよくは分からないんですが、自分たちも楽しくならなくてはいけない気がしたんです。
かわいいメジロの声が、びっくりして空に舞い上がっています。その空には、雲なんて一つもなくて…ただ、お日さまだけがとっても楽しそうに輝いていました。

「ねぇ、今度は何をする？」
雪だるまをきちんと軒下に並べた後で、サトミが急にたずねてきます。それがあまりに突然だったので、ユウタは思わず「雪合戦を…」と言いかけてしまいました。
でも、すぐにその声を飲みこんでしまいます。
だって、マリちゃんとメグちゃんが、とっても不安そうな目をしてるんです。いつもカズくんやターくんの雪合戦を見ている二人は、雪合戦はとっても恐くて危ないものだと思っていました。
そんな二人の目を見ては、さすがにユウタも強くは言えません。
「じゃぁ、そうしようよ」
でも、びっくりしたことに、サトミがそう言ってにっこり笑ったんです。
「でも、玉はかたくしたらダメだからね」

「…もちろんさ！」
気をとりなおして、ユウタは約束しました。
メグちゃんとマリちゃんも、うなずきます。えぇ、サトミお姉ちゃんが賛成なら仕方ありません。でも、雪合戦をするなんて、本当に、お姉ちゃんてスゴイです。
…もちろん、サトミは知っていたんです。ユウタくんが雪合戦をしたいんだ、ってこと……
これが、このとき、サトミが思いついたたった一つのお礼だったんです。
「よし！　じゃぁ、じゃんけんでチームを決めようか」
ほら、ユウタくんはとっても楽しそうです。はりきっているユウタくんのそんな姿を、サトミはうれしくて、にこにこしながら見つめていました。
「じゃ～ん、けん、ほいっ！」
あっ、ほら、きれいにグーとパーで分かれています。
「ボクとマリちゃんだね」
サトミはマリちゃんのちっちゃな手を引くと、急いでお庭のはしっこまで行きました。
そうそう、サトミは自分のことを「ボク」と言います。でも、どうしてなのか、それがいつからなのか、幼なじみのユウタだって知りません。もちろん、サトミ自身だって知らないでしょう。でも、サトミは「ボク」なんて言葉がぴったりの女の子なんです。えぇ、本当に、そうでした。
「最初は十個だけだぞ」
「うん！」
サトミの返事を聞きながら、ユウタもメグちゃんと雪の玉を作り始めています。
でも、えぇ…もちろん、かわいい毛糸の手袋が作る雪の玉は、とっても小さなものです。それでも、ユウタは何も言いませんでした。だって、今日は、男の子の雪合戦ではないんです。

「できたよ！」
サトミの大きな声が聞こえてきます。ユウタは十個目の玉を雪の上に置くと、白いぼうしをかぶったサツキの木から頭だけを出しました。
「じゃぁ、始め！」
そう言いながら、ユウタはサトミめがけて雪の球を投げました。その横で、メグちゃんもえいっ！　と丸い玉を力いっぱい放り投げています。
でも、その白くてちっちゃな雪玉は、マリちゃんのところまで届きませんでした。もちろん、マリちゃんの玉だって、ここまでは届いていません。それでもうれしくって、メグちゃんは大好きなお兄ちゃんのそばで、すきとおったきれいな声で笑い声を上げました。
ユウタとサトミは、持てるだけの玉を持って飛び出すと、あちこち走り回っています。ぶつけたり、ぶつけられたり…笑ったり、くやしがったりする声があちこちで聞こえてきます。
さぁ、大変です。あれでは、すぐに雪の玉なんてなくなってしまうでしょう。
大急ぎ、です。メグちゃんはしゃがみこむと、すぐにもっとたくさんの雪の玉を作り始めていました。
はぁはぁと白い息をはきながら、ユウタはメグちゃんのところへと戻ってきました。二人とも、玉ぎれになったんです。すぐに新しい玉を作ろうと、雪をまとったサツキの後ろに回って……
「…！」
思わずびっくりして、ユウタは立ち止まってしまいました。
だって…雪の上にしゃがみこんだメグちゃんの周りに、とってもたくさんの雪玉が積み上げられていたんです。白くてちっちゃな、丸いかわいらしい玉が…本当に、たくさんあるんです…
「……はい…」
ちょっぴりはにかみながら、両手にいっぱい、雪の玉をのせて渡してくれます。

でも…えぇ、でも、ユウタはあわてて首を振っていました。
ユウタは、メグちゃんに玉作りだけをさせようなんて…そんなこと、思ってもいなかったんです。メグちゃんだって、走り回って、玉を投げてみたいはずです。…えぇ、きっとそうです。
ユウタの耳には、さっきのうれしそうなメグちゃんの笑い声が、まだ聞こえていました。
…だから、にやっと笑って言ったんです。
「ありがとう、メグちゃん。
でも、ほら。今度はメグちゃんが投げてきたらいいよ。見てごらん、マリが出てきたろ？」
生まれてからずっと、いっしょに遊んできたサトミには…えぇ、何だってユウタくんのことが分かるんです。
今だって、そうです。サトミには、ちゃぁんと、分かっていました。
「え～い！」
楽しくってたまらないマリちゃんは、まだまだ届かないのに、もう雪の玉を投げています。
いつもはおとなしいメグちゃんだって、今日は負けてはいません。いっぱいの雪の玉を持って、サツキの後ろから飛び出していきました。
「…えい…！」
きゃぁきゃぁと、かわいい声が広がります。その声を聞きながら、ユウタもサトミも一生懸命、次の玉を作り始めていました。
あっというまに玉を切らした、マリちゃんとメグちゃんが戻ってくると…さぁ、また新しい雪玉を持って飛び出します。
そしてすぐに、今度はユウタとサトミの笑い声が広がっていきました。

どのくらい、青空の下をかけ回っていたでしょう。
ふと、ユウタが戻ってみると、サツキのかげでメグちゃんは両手

にはぁーっと温かな息を吹きかけていました。
なんだか、思ったとおりに指が動かなくなってきて…ちょっぴり、メグちゃんは困っていたんです。
かわいい毛糸の手袋が、すっかりぬれてしまっています。
「手袋をはずしたほうがいいよ、メグちゃん」
自分も手袋をとると、ユウタはメグちゃんの手から手袋をはずしました。
ちっちゃなその細い指先が、とても冷たくなっています。
だまっているメグちゃんの手をしばらくこすりながら、ユウタは一人で小さくうなずいていました。
…えぇ、そうです。遊びには、「それをやめるとき」がちゃんとあります。
ユウタには、それがよく分かっていました。
「よし」
メグちゃんの手をとんとん、とはげますように軽くたたくと、ユウタは勢いよく立ち上がりました。
「おしまい！　お…」
べしっ！
そのとたん、サトミの投げた雪玉が、みごとにユウタの顔にぶつけられていました。

……

「ごめんね、ユウタくん」
暖かなお家の中にすわりながら、サトミは困った顔をしていました。
だって…さっきから、ユウタくんがちっとも口をきいてくれないんです。
ユウタくんは、ストーブの前でだまったまま、メグちゃんの指をこすってばかりいます。そのメグちゃんも、どうしていいのか分か

らなくて…泣きそうになっていました。
　とっても大好きなお姉ちゃんとお兄ちゃんなんです。…ケンカなんて、してもらいたくありません……
　そんなメグちゃんをちらっと見て、やっと、ユウタくんはその口を静かに動かしてくれました。
「メグちゃんも、オカシナ村に住んでたら良かったのにな」
「……え…？」
「オカシナ村の雪はね、ぜぇ～んぜん、冷たくないんだよ。
　それに、砂糖みたいに甘いんだ」
「砂糖？　じゃぁ、溶けたりしないの？」
　マリちゃんの言葉に、もちろん、とユウタはうなずきました。
「新しく降った雪は、どんどん積もっていくだけなんだ。だから、いつだって、さふさふ、って足あとをつけることができるのさ」
　マリちゃんは、今朝のことを思い出してわくわくしてしまいました。
　いつもいつも、あんなふうに楽しい気分でいられるんです。…ええぇ、いつだって、まっさらな雪でメグちゃんと遊べるんです！
　…どうして、ユウタお兄ちゃんだけがオカシナ村に行けるんでしょう。とっても不公平です。
　えぇ、もちろん、マリちゃんだって行ってみたいんです。
「…どんどん…雪が積もるの…？」
　メグちゃんが小さく首をかしげています。その澄んだきれいな目に、ユウタはにやっと笑ってうなずきました。
「そうなんだ。去年なんて、二階の窓の下まで積もったんだよ」
　二階の窓の下まで！
　メグちゃんもマリちゃんも、とってもびっくりしてしまいました。
　雪って、そんなにもたくさん降るものなんでしょうか。
「でも、困ったことがあるんだ。
　オカシナ村の雪は溶けないから、このままだと、夏になってもプールには行けないんだよ。だって、プールも雪の下なんだからね」

それは困ります。だって、マリちゃんはプールが大好きなんです。
…えぇ、これはナイショですが、お兄ちゃんと遊ぶよりも大好きなんです。
「マリなんか、きっと泣いて怒るだろうな」
ユウタお兄ちゃんったら、にやにや笑ってるんです。もうっ！
ぷくっとふくれたマリちゃんに、ユウタは片目をつむってみせました。
「でも、ちゃぁんと、雪はなくなるのさ。
メグちゃんは、春一番って知ってるかな」
…え？　…春一番…？
……えっと…えっとぉ……
「春一番って言うのは、その年になってから、初めて吹く南風のことなんだ。とっても強い風で、あらしみたいにビュウビュウ吹いてくるんだよ」
春一番、ってそんな風だったんです。ちっとも知りませんでした。
やっぱり、お兄ちゃんって、スゴイです。
「オカシナ村にその春一番が吹いた時、今まで積もってた雪が、ぜぇ～んぶ、空に向かって吹き飛ばされてしまうんだ。
今日みたいにきれいに晴れた朝、お日さまの光で金色に輝いてる雪が、風に乗ってずぅっと村の中を流れていくんだよ」
…きらきらと、金色の光の粒が…お家の間を飛んでいきます。…まるで、光のカーテンです。冬の間溶けなかった雪が、ぜぇ～んぶ、風と一緒に空の中を流れていきます……
……なんて、きれいなんでしょう！
「風に飛ばされた雪はね、どこか遠い所で降り積もるんだ。
そこの冬が終わるまで、ずっと…春一番が吹くまで、ずっと溶けずに、ね」
…なんだか、ふんわりとした気持ちで…サトミは、その風景を思い描いていました。
思わず、にこにこしてしまいます……

えぇ、ユウタくんのオカシナ村のおはなしを、サトミくらい好きな人はいないでしょう。そうですとも。だれにも負けないくらい好きなんだ、ってサトミは自分でも思っていました。

その時、ふとサトミはストーブのそばで振り向いているユウタくんと目が合ってしまいました。

…やわらかな光の中で…ユウタくんは、にやっと笑いかけてくれています……

なんだか、泣きたくなるくらい、うれしくって……とっても困ってしまいます。

でも…えぇ、でも、サトミはそんなユウタくんにっこりと笑い返していました。

お日さまの光は、どんどんと強くなっています。外の雪も、その温かな日差しで、少しずつ溶けて水になってしまうことでしょう。

きっと、春一番ももうすぐです。

『雪の朝のおはなし』おわり

5．メグちゃんの夢

……あっ…

……かわいい…スズメさんの声がしています……

もう…朝になったんです。

……えぇ…すぐに、起きなくてはいけません…もちろん、一人で、です。

だって…メグちゃんはもう、四つのお姉さんなんですもの……

……ぱっちん！

そんな音が聞こえてきそうなくらいに…しっかりと、メグちゃんは目を開けていました。

すぐそばのカーテンが、明るく輝いています。スミレさんの絵が、お日さまの光に包まれています…

しばらくの間、メグちゃんはそのお気に入りのカーテンを見上げていました。

メグちゃんは、スミレさんやネモフィラさんが大好きなんです。ちっちゃくって、かわいくて……ドキドキしてしまいます……

…あっ…そう言えば、さっきも……

メグちゃんは、急にうれしくなって、ベッドの中でくすくすと笑い出してしまいました。

だって…ねぇ！　…あんなに……

……あれ…？

その時、ベッドの中で、メグちゃんはかわいく首をかしげてしまいました。

だって…だって、どうしてこんなにも自分がうれしいのか、メグちゃんには分からなかったんです。…どうしてでしょう……えぇ、ついさっきまでは、あんなにもうれしくって…楽しくって……

…あっ！

そうです、分かりました。…えぇ、四つになったんですもの。お

姉さんなんですもの。メグちゃんにだって、分かります。
あんなにうれしかったものは、『夢』だったんです。だから、一生懸命になっても、ちっとも思い出せなかったんです。
なんだか、今度はちょっぴり、がっかりしてしまいます……
……あれ…？
またまた、メグちゃんはベッドの中で、かわいく首をかしげてしまいました。
だって……メグちゃんには、どうして『夢』がすぐになくなってしまうのか、不思議だったんです。
…ね？　不思議でしょう…？
あんなにも楽しかったのに…これでは、大好きなお姉ちゃんにも、おとなりのマリちゃんにも、『夢』のおはなしをすることができません。
そんなのって、ないです。
どうして、メグちゃんの『夢』はなくなってしまうんでしょう……
…『夢』って、何なのでしょうか…

ぱっ！　とベッドから飛び出すと、メグちゃんはパジャマのまま、大急ぎでお母さんを探しに行きました。
…いました！　お台所でおかたづけをしています。
「ママ…！」
すきとおった、とってもきれいな声で、メグちゃんはお母さんを見上げました。
「どうしたの？」
パジャマのままで走ってくるなんて、ちっともメグちゃんらしくありません。だから、お母さんはとてもびっくりしていました。
「…あのね……『夢』って…なぁに…？」
「夢？」
こくん、とうなずきます。
「どうして…朝になったら…なくなっちゃうの…？」

なんだか…悲しくなってきます…
…ちょっぴりだまってから、お母さんは教えてくれました。
「夢はねぇ、メグちゃんが夜になっても恐くありませんように、ってお日さまがくれたプレゼントなの。
だから、朝になったら、もう恐くないからね、ってなくなってしまうのよ」
そんな…！　プレゼントが、なくなってしまうなんて…！
……そんなのって、ないです。
…メグちゃんが、悪い子だからでしょうか……
だから…だから、お日さまは朝になったらプレゼントを取り上げて…いじわるするんでしょうか……
……とっても…とっても、悲しくなってしまいます……

メグちゃんはすっかりしょげながら、今度は、お父さんを探しに行きました。
…いました！
「パパ…！」
すきとおった、とってもきれいな声で、メグちゃんはお父さんを見上げました。
「どうしたんだ？」
パジャマのままで走ってくるなんて、ちっともメグちゃんらしくありません。だから、お父さんはとてもびっくりしていました。
「…あのね……『夢』って…なぁに…？」
「夢？」
こくん、とうなずきます。
「どうして…朝になったら……なくなっちゃうの…？」
なんだか…とっても悲しくなってきます…
…ちょっぴりだまってから、お父さんは教えてくれました。
「夢はメグの大切な宝物なんだ。だから、どこにもなくなったりしないさ。

メグは夢をとっても大切にしてるから、いつも目がさめる前に、しっかりカギをかけて宝箱の中にかくしてるんだよ。
でも、そのカギは夢の中のものだから、朝になってベッドから出た時には、それをどこかに置き忘れてしまってるんだ。
夢と同じように、な」
そんな…！　カギをどこに置いたのか、忘れてしまうなんて…！
……そんなのって、ないです。
…メグちゃんが、悪い子だからでしょうか……
だから…だから、宝箱を開けられないんでしょうか……
……とっても…とっても…とぉーっても、悲しくなってしまいます……

メグちゃんはすっかりしょげながら…いいえ、もう、泣きそうになりながら……今度は、大好きなお姉ちゃんを探しに行きました。
…いました！　お部屋で、本を読んでいます。
「お姉ちゃん…！」
すきとおった、とってもきれいな声で、メグちゃんはお姉ちゃんを見上げました。
「どうしたのよ？」
パジャマのままで走ってくるなんて…ちっとも、メグちゃんらしくないんです。だから、サトミはとてもびっくりしてしまいました。
「…あのね……『夢』って…なぁに…？」
「夢？」
メグちゃんは、こくん、とうなずいています。
「どうして…朝になったら……なくなっちゃうの…？」
…えぇ、とっても…とっても……とぉーっても、悲しくなってきます…
そんなメグちゃんに、サトミはすぐに言いました。
「夢ってね、とってもステキで…ドキドキするものだよ。それはね、絶対、なくなったりしないんだから」

「…でも…でも……なくしちゃったの……」
やっぱり…やっぱり、メグちゃんが悪い子だからなんです。
だから…だから、夢をなくしてしまうんです……
……くすん。
…いっぱいの涙が、あふれてきます。
でも…お姉ちゃんは、やさしくほほえんでくれました。
「ちゃぁんと、あるよ。ほら！　ここに」
ちょこん、とおでこをつつかれてしまいます。
泣くのをやめて、メグちゃんは目を大きくすると、お姉ちゃんを見上げました。
「ただね、忘れてるフリをしてるだけなんだから。夢はね、ちゃぁんと、メグの中に残ってるよ」
「……でも…でも、ユウタお兄ちゃん…時々、『夢』のおはなし、してくれるの…
忘れたり、しないの……」
えぇ、そうなんです。ユウタお兄ちゃんは、昨日、こんな夢を見たんだ、って…時々、こっそりおはなししてくれるんです。でも、あれは、オカシナ村のおはなしかもしれません…
「……ふ～ん…」
ちょっとびっくりしてしまいましたが、サトミはすぐにいたずらっぽく、片目をつむってみせました。
「じゃぁね、簡単だよ。ユウタくんに、聞いてみたら？
どうして、お兄ちゃんは夢をなくさないの？　って」
そうです…！　ユウタお兄ちゃんなら、きっと、教えてくれるはずです。
ちょっぴり元気になって、メグちゃんは走り出そうと…
……いいえ、でも、ダメです。すぐに、お姉ちゃんにつかまってしまいます。
「ダメダメ！　先にパジャマを着替えないとね」
「あっ…はーい…！」

えぇ、そうでした。パジャマのままでは、ユウタお兄ちゃんのお家には行けません。
恥ずかしそうに、はにかみながら…メグちゃんは急いでお部屋に帰ると、服を着替え始めました。

「…ユウタお兄ちゃん…！」
お部屋のドアのすきまから、そう…っとのぞきこんでみます。
「メグちゃん？」
たった一人でたずねてくるなんて、恥ずかしがり屋さんのメグちゃんらしくありません。だから、ユウタお兄ちゃんはとてもびっくりしていました。
「どうしたんだい？」
「…あのね……」
…でも…でも、どうしても、言葉が出てきてくれません。
困ってしまいます。どうしたらいいんでしょう…
……その時、ユウタお兄ちゃんが、ほほえみながら近付いてきてくれました。
「ほら、こっちにおいでよ」
おはなしがあるんだな、って分かってくれたんです。やっぱり、ユウタお兄ちゃんです。
そっと手をとって、ユウタお兄ちゃんはやさしくお部屋に引き入れてくれました。
プラモデルの飛行機や電車が、お部屋の中に散らばっています。…えぇ、あまりきれいではないと思います。でも、大急ぎで、おかたづけしてくれています。
「では、こちらへどうぞ」
ユウタお兄ちゃんが、お姫さまにするみたいに頭を下げてくれたので、思わずメグちゃんはくすくすと笑ってしまいました。
…でも、ちょこんとすわってからは……
やっぱり、モジモジしてしまうんです。いつもより、なんだか、

はにかんでしまいます。
「…どうしたんだい？」
大好きなユウタお兄ちゃんは、もう一度、そっとたずねてきてくれます。
「…あのね…あのね……」
どうして、声って、こんなにも重いんでしょう…
でも…ここで何も言わなかったら……大好きなユウタお兄ちゃんに、嫌われてしまうかもしれません。
……そんなの、イヤです…！
「……ユウタお兄ちゃん…」
もうちょっとです。
……えいっ！
「…あのね……『夢』って…なぁに…？」
「『夢』？」
こくん、とうなずきます。
「どうして…朝になっても……ユウタお兄ちゃんはなくさないの…？」
とっても一生懸命なメグちゃんに、ユウタはにやっと笑うとすぐに言いました。
「僕が『夢』をなくさないのは、僕がオカシナ村にも住んでるからだよ」
「…え？」
「ううん、本当はね、メグちゃんだって、オカシナ村に住んでるんだ」
「メグちゃんが…オカシナ村に……？」
びっくり、です。
オカシナ村は、いつもユウタお兄ちゃんのおはなしに出てくるところです。あんなに楽しいところに、メグちゃんも住んでるんでしょうか…
「そうさ。メグちゃんだって、オカシナ村に住んでるんだよ。

いいかい？　これからするおはなしは、ナイショのおはなしなんだけど…」
ナイショのおはなし…！　うわぁ…ドキドキしてしまいます…
「実はね、オカシナ村は、今、夜中なんだよ。だから、オカシナ村に住んでるメグちゃんは、今、ちょうどベッドの中で夢を見てるところなんだ」
「……」
「その夢の中で、メグちゃんは僕の部屋に遊びに来てて、こう言ってるんだよ。
『…あのね……『夢』って…なぁに…？』って…」
「…今、みたいに…？」
だって……それは、今…こうして、メグちゃんがしてることでしょう？
「そう。オカシナ村のメグちゃんは、今、こうして僕とおはなししてるメグちゃんを、ちょうど夢の中で見てるところなんだよ」
「……！」
「オカシナ村のメグちゃんが朝になって起きるころになると、今度は反対にこっちが夜になるんだ。だから、もちろん、メグちゃんはベッドの中に入るんだけど…
その時、メグちゃんが見る夢は、オカシナ村のメグちゃんが本当にしてることなんだよ」
えっと…えっと……
…ちょっぴり、分かりません。
「いいかい？　メグちゃん」
でも、お兄ちゃんはちゃんと分かってくれてるんです…やさしく、おはなししてくれるんです。
「メグちゃんの夢に出てくるメグちゃんは、本当は、オカシナ村に住んでるメグちゃんなんだ。
だから、オカシナ村のメグちゃんがかけっこをして遊んだら、メグちゃんは夢の中で、かけっこをしてるオカシナ村のメグちゃんを

見るんだよ」
「メグちゃんが…オカシナ村のメグちゃんを夢に見るの…？」
「そうなんだ。同じように、オカシナ村のメグちゃんも、メグちゃんがマリと遊んだり、サトミと笑ったりしてるところを、夢に見てるんだよ」
　そうだったんです…！
「だからね、メグちゃん？
　メグちゃんがオカシナ村からいなくなったり、オカシナ村のことを忘れたりしないなら…メグちゃんは、本当には『夢』をなくしたりしないんだ。
　だって、メグちゃんがオカシナ村にもいる限り、『夢』はずっと続くんだからね。
　ただ、今は、メグちゃんにはオカシナ村をのぞけないから…忘れてるフリをしてるだけなんだよ」
　えぇ！　お姉ちゃんも、そう言ってくれました。
「きっとね、夢を思い出そうとしてるメグちゃんの夢を見て、オカシナ村のメグちゃんは、今ごろ眠りながらくすくす笑ってるんじゃないかな」
「……！」
　それは、困ります。…とっても、恥ずかしくなってしまいます…
　…泣いてるところも、見られたんでしょうか……
　……あれ？
　でも…でも、メグちゃんの夢を見ているのも、オカシナ村のメグちゃんなんです。
　…えぇ、そうです。だったら、恥ずかしくなんてありません。メグちゃんは、やっぱりメグちゃんなんですもの。
「僕が時々してあげるおはなしも、やっぱり、同じ『夢』の一つなんだ。だって、全部、オカシナ村のおはなしなんだからね」
　そうだったんです。やっぱり、あの夢も大好きなオカシナ村のおはなしの一つだったんです。

…あっ……
「…でも…でも……」
そうです！　…そうなんです……
「…ユウタお兄ちゃんは…どうして、思い出せるの…？」
「それはね…う～ん……
あのね、いいかい？　メグちゃん。絶対、サトミにはナイショにしてくれるかな」
それは…困ってしまいます。
ナイショのおはなしは、とってもドキドキします。うれしいんです。
でも…大好きなお姉ちゃんには、おはなししたいこともあるんです…
…モジモジしてしまいます。どうすれば、いいんでしょう……
……でも、ユウタお兄ちゃんは、やっぱりユウタお兄ちゃんなんです。とってもやさしいんです。
「まぁ、いいや。本当は、したらいけないこともしてるんだけど…
サトミだって、言いふらしたりしないだろうからね」
「……！」
ユウタお兄ちゃん…したらいけないことを、してるんでしょうか…
ちょっぴり、不安になってしまいます。
「実はね、メグちゃん」
ドキドキ……
「僕はね、こうして目をさましてる時にも、少しだけならオカシナ村をのぞくことができるんだ。それに、僕が夜ふかししてる時なんて、起きたばかりのオカシナ村の僕とおはなしすることもあるんだよ。
でも、オカシナ村の僕は朝寝坊だから、なかなかうまく会えなくて……
そんな時にはね、メグちゃん…」
「……」

「こっそり、僕は日記を読んでしまうんだよ」
「……！」
「オカシナ村の僕はね、毎日、ちゃぁんと、日記をつけてるんだ。その日記を、僕はオカシナ村の僕が眠ってる横で、そっとのぞいてるんだよ。
その日記に書いてあるのは、オカシナ村の僕が本当にしてたことだから…それは、僕が見た夢と全く同じものになるんだよ」
「……」
…どうしたらいいんでしょう……とっても、悲しくなってきます…
自分のものではない日記を、こっそりと読むなんて……そんないけないこと、メグちゃんには、とても考えられません。
もう、夢なんて、絶対、思い出したくありません。えぇ、そうです。
とってもうれしかった夢を、マリちゃんやお姉ちゃんにおはなしできないのは、残念ですが……でも、でも、メグちゃんは悪い子になんて、なりたくないんです。
…しょんぼりしてしまいます……
「メグちゃん？」
ユウタお兄ちゃんが、心配そうに、そっとのぞきこんでくれます…
……でも……
「…ユウタお兄ちゃん…悪い人なの……？」
「え？　あっ…」
悲しくて…大好きなユウタお兄ちゃんを、ちらっと見上げて……
でも、すぐにうつむいてしまいます。
困ってしまっているのが…分かるんです……
…だから……
ぱっ！　と立ち上がると、メグちゃんは大急ぎで、お兄ちゃんのお部屋から飛び出してしまいました。
「う～ん…失敗だったかな…」
……でも……メグちゃんには、もう…そんなつぶやきは、聞こえ

ていませんでした……

……

大好きなユウタお兄ちゃんが、悪い人だったなんて……！

いつも…あんなに楽しいおはなしをしてくれるのに……いつも、あんなにやさしくしてくれるのに……

…でも……

……でも……

本当に、ユウタお兄ちゃんは…悪い人なんでしょうか…

…そうであってほしくありません。…えぇ、そうです。絶対、そうであってほしくないんです……

だから…お家に帰って、すぐに…メグちゃんは、お姉ちゃんに全部おはなししたんです。

ユウタお兄ちゃんがしてくれた、オカシナ村と『夢』のおはなしを…そして……

…お兄ちゃんが、日記をこっそり読んでることも……

「ユウタお兄ちゃん…悪い人…なの……？」

くすん…

…とっても悲しいんです。とっても…とぉーっても……

……でも…お姉ちゃんは……

…にっこり、笑ってくれたんです……

「ユウタくんは、いけないことなんてしてないよ」

「…？」

「だって、その日記は、オカシナ村のユウタくんが書いてるんだよ？　ユウタくんが、ユウタくんの日記を読んだって、ちっともいけないことじゃないじゃない」

「……！」

そうです！　日記は、オカシナ村に住んでる、ユウタお兄ちゃんが書いてるんです。オカシナ村に住んでいても、ユウタお兄ちゃん

は、ユウタお兄ちゃんです。
「…よかった……」
ユウタお兄ちゃんは…大好きなユウタお兄ちゃんは、やっぱり、悪い人ではなかったんです。…えぇ、やっぱり、そうだったんです……
うれしくて…にこにこしてしまいます。
ピンポーン！
「メグちゃん？」
あっ！　ユウタお兄ちゃんです。
「はーい…！」
すっかり元気になって、メグちゃんは走り出していました。
そのすぐ後を、お姉ちゃんもついてきてくれます。
（ちゃんと、あやまらないと…な）
ユウタお兄ちゃんがそんなことを思ってるなんて、メグちゃんはちっとも知りません。
だから、玄関まで飛び出したメグちゃんと、そのすぐ後ろにいるお姉ちゃんを見て、ユウタお兄ちゃんがどうしてほっとしたのか、メグちゃんには分かりませんでした。
「……？」
きょとんと見上げると…お兄ちゃんは、なんだか照れてるみたいです。
「ねぇ、ボクにも『夢』のおはなしを聞かせてよ」
お姉ちゃんがユウタお兄ちゃんにそう言うので、メグちゃんもワクワクしながらうなずきました。
すると、ユウタお兄ちゃんが、にやっと笑って言ってくれたんです。
「仕方がないな。じゃぁ、今日は特別だぞ」
大好きなユウタお兄ちゃんが、やさしく笑いかけてくれます…
……よかった…本当に、ユウタお兄ちゃんが悪い人でなくて…本当に、よかった……

メグちゃんはうれしくて…うれしくて……
…そっと…きれいなほほえみを浮かべていました……

……

「どんな夢を見てるのかな…」
ベッドの中でにっこりしてるメグちゃんを見て…オカシナ村のサトミは、やさしくそっとほほえみました。
きっと、明日になれば、ユウタくんがメグちゃんの代わりに、教えてくれるはずです…
楽しい『夢』のおはなしを……

『メグちゃんの夢』おわり

6．空色のバス

実は、まだ五つだったころ、おっとりターくんはとっても恐がり屋さんでした。

でも、みんなの恐がりとは、どこかちょっとちがってたんです。

えぇ、もちろん、お母さんやサトミお姉ちゃんだって、とっても恐いんです。でも、もっともっと恐いものがターくんにはありました。

それは…『なんだか、よく分からないもの』なんです。

『なんだか、よく分からないもの』が恐いなんて…だれにも言えません。そうです。カズくんやユウタくんならともかく…そんなことを言えば、四つのマリちゃんにだって笑われてしまうでしょう。

だから、だれにも言えないんです。

……でも…でも、やっぱり『なんだか、よく分からないもの』が恐いんです。

夜になって、お部屋をまっくらにすると…いつも、ターくんはぎゅっ！　と目を閉じてしまいます。絶対に、開けたりしません。もちろんです。

…だって……目を開けても、そこがお部屋なんだ、って…分からないんです。ぜぇ～んぶ、まっくらで…何も見えないんですから。机やプラモデル、本だなだって見えないのに、どうして、そこがターくんのお部屋だなんて分かるんでしょう。

きっと、夜になってターくんがベッドに入ってからは、周りには『なんだか、よく分からないもの』が、いぃ～っぱい、つまってるんです。う～んと、う～んと、つまってるんです。

…ほら…ベッドのそばで、オバケがターくんを見下ろして、にやにや笑っています。…いいえ、大きな怪獣が、ぐわぁ～って口を開けて…ターくんを食べようとしています……

なにしろ、そこに何があるのか分かんないんですから、何がいて

もおかしくないんです！
電気をつければいいのに……でも、ターくんにはできません。だって、そうでしょう？　もしも電気をつけて、こわぁ～い『なんだか、よく分からないもの』が見えたりしたら、どうしたらいいんでしょう。
ですから、ターくんは夜になったら、絶対、目を開けようとしなかったんです。

そんなターくんでしたから、その日は幼稚園になんて行きたくなかったんです。
その日は、すごい霧がお家をすっぽりと包み込んでいました。まるで、まっ白い毛布が、ぐるりと自分の周りにかぶさってるみたいです。お家から出ても…ほら！　門がうっすらとしか見えてません。もちろん、おむかいのユウタくんのお家なんて、どこにもないんです。
……えぇ、そうです。ユウタくんのお家なんて…本当にあったんでしょうか……
…ユウタくんだって……本当に、いるんでしょうか……
…えぇ…昨日、確かにユウタくんと遊んだはずです。でも…あれは、ぜぇ～んぶ、夢だったのかもしれません。きっと、昨日までのユウタくんは…本当は『なんだか、よく分からないもの』だったんです。
今では、その『なんだか、よく分からないもの』はユウタくんではなくて…もっと恐い『何か』に変わってるのかもしれません……
……どうしたらいいんでしょう…とっても、恐いんです。
「どうしたの、タダシ！　早くしないと、バスが行っちゃうわよ」
急に、後ろからお母さんの声がしたので、ターくんはびっくりしてしまいました。
「…だ、だって、何も見えないんだよ？」
「霧なんだから、当たり前でしょ！」

お母さんなんて、ちっとも分かってくれないんです。えぇ、いつもそうです。本当に、イヤになります。
カチッ！
あっ、玄関のカギをしめられてしまいました。
仕方ありません。ターくんはそっと、そっと…そぉ～っと歩き始めました。
……まずは、門まで行かなくてはいけません。
…どうしても…足が、震えてしまいます……
……この白い壁の向こうから…『何か』が出てきたらどうしましょう……
「どうしたんだよ、ターくん」
「わっ！」
急に、ユウタくんの声が聞こえたんです。もう、びっくりして…ターくんは、思わず泣きそうになっていました。
いつのまにか、目の前の毛布の中に、ユウタくんがぼんやりと見えてきたんです。……えぇ、門の前にいるのは…少なくとも『なんだか、よく分からないもの』ではありませんでした。
「ユウタくん…」
ほっとして、そのまま門を出たんですが…
……このまっ白な霧が恐い、なんて……言いたいけど…でも、でも言えないんです。
なんだか、とても恥ずかしい気がします…
だから、ターくんは何も言いませんでした。
すると、ユウタくんがにやっと笑って、頭を軽くたたいてきたんです。
「ほら、大丈夫だよ。マリやメグちゃんだって、あんなにうれしそうじゃないか」
……え？
…言われてみると…えぇ、確かに、すぐ近くで二人の楽しそうな声がしています。

「すごいね、すごいね！　ほらっ！」
「…うん……！」
マリちゃんなんて、すっかりはしゃいでしまってます。メグちゃんのやさしい声も、マリちゃんのすごいね、の合間をぬって小さく聞こえていました。
……あの、弱虫で恥ずかしがりやさんのメグちゃんでさえ、恐がってないんです……
…やっぱり……霧が恐い、なんて言えません…えぇ、絶対に、です。
「な？　恐くなんてないんだから」
「ユウタくん！　そんな言い方、ひどいよ」
今度は、すぐそばからサトミお姉ちゃんの声だけが聞こえてきました。
…あっ、やっと見えてきます。うっすらと、ランドセルを背負ったお姉ちゃんが、毛布の中から浮かび上がってきています。
「なんだよ。ひどいことなんて言ってないだろ！」
「言ってるよ！
ほら、ターくん。一緒に行こ？　もすうぐ、バスが出ちゃうよ」
「…う、ん…」
お姉ちゃんは、しっかりと手をつないでくれます。…えぇ、お母さんとはオオチガイ、です。
手を引かれながら振り返って見ると、ユウタくんが少し口をとがらせています。……でも、それも…すぐに、まっ白い壁の向こうへと消えていってしまいました。
「すごい霧だね。ターくん、大丈夫？」
「うん…」
…えぇ！　こんなにも強いお姉ちゃんが一緒なんです。きっと、大丈夫です。
えぇ……きっと…
……でも、でも……やっぱり、きょろきょろできません。じっと、

お姉ちゃんがつないでくれた手を見てしまいます。
…この手がはなれたら、どうしたらいいのでしょう……
だから、絶対にはなれたりしないように…ぎゅっ！　と力いっぱい、ターくんはお姉ちゃんの手をにぎりしめました。

…もうすぐ、カズくんのお家でしょうか。
幼稚園のバスがむかえに来てくれる橋まで、あとちょっとのはずです……
「ブッブーッ！」
「……！」
急に聞こえてきたので、思わずびっくりしてしまいましたが…ええ、あれはバスの音です。『なんだか、よく分からないもの』ではありません。
……ええ…そのはず、です……
…でも…でも、バスが来るまでには……まだ、時間があるはずです……
……じゃ、じゃぁ…あの音は……
とっても恐いものを見てしまいそうで……ターくんは、きゅっと目を閉じてしまいました。
…ええ、もしもバスでないのなら、あれはきっと、『なんだか、よく分からないもの』の音なんです！
「あ～ぁ、そんなんじゃないのに！」
すぐ横を通っていく『何か』から、その時、とても残念そうな自分の声が聞こえてきました。
……え？　…自分の声？
びっくりして目を開けると…すぐそばを、空色のきれいなバスが通りすぎていきます。
きらきらと光ってる、そのバスの窓から……
…ええ！　そこから顔を出してるのは、どう見ても、ターくんなんです！

ぽかん…と、あっけにとられて、ターくんは笑ってる『自分』の顔を見上げていました。
あんなに一生懸命にぎってたのに…サトミお姉ちゃんからも、思わず手をはなしてしまってます。
「せっかく、オカシナ村につれてってあげようと思ったのに！」
そうだったんです！　とっても残念です。
だって…ターくんは、ユウタくんがおはなししてくれる、オカシナ村に行けたらいいなぁ、って…いつも、そう思ってたんです。
「ちゃぁんと、目を開けとかないとね。でないと、『なんだか、よく分からない恐いもの』と一緒に、『なんだか、よく分からない楽しいもの』まで見のがしちゃうよ。
また来るから、その時は、いっしょにオカシナ村まで行こうね！」
きっと、このターくんは、オカシナ村のターくんなんです。
……でも…なんだか、ターくんよりも強くて…スゴイ子に思えます。…まるで、カズくんみたいです。
……でも…でも、えぇ……あの子だって、ターくんにはちがいありません。
えぇ……そうですとも！
「うん！　約束するよぉ」
空色をしたバスは、もう霧の向こうに消えようとしています。でも消える直前に、オカシナ村のターくんは、窓から元気に手を振ってくれました。
それも、少しずつ見えなくなっていきます…
……あれ…？
バスが見えなくなった所から…少しずつ、風が流れ出してきて……
「あっ！　霧が流れてるよ！」
サトミお姉ちゃんが叫んでいます。
…えぇ、ゆっくりと霧が流れて、カズくんのお家の大きな松の木や、その向こうの橋がだんだんと見えてきています。
しっかりと目を開けて、ターくんはそんな霧を見つめていました。

「ほら、もうみんな並んでるよ」
急にターくんはそう言うと、ぱっ！　と橋の方へと走り出していきます。
そんなターくんを、サトミはびっくりした顔で見送っていました
……
……ターくんが教えてくれた、本当にあったおはなしです。

『空色のバス』おわり

7．鏡のなかの青い空

…その日、は……

……いつもと…同じ……

きれいな…本当に、きれいな…

……青空が、広がっていたんです……

ちょっと…肌寒いかな、って……もう、秋になるのかな、って…

……

そう思いながら……いつもと…同じように……

……でも……でも……

…いつもと…同じではなかったんです……

……動かないタムを見つけたのは……

…メグちゃんでした……

…大好きな…お姉ちゃんに、言われたんです……

……タムは…死んだんだ、って……

それから、ずっと……メグちゃんは、泣き続けていました……

……

「マリ！　お前が泣いてて、どうするんだよっ！」

そんなことを言ってるお兄ちゃんだって、まだ目が赤いんです。

えぇ、そうです。お兄ちゃんだって、泣いていたんです。どうして、マリちゃんが泣いたらいけないんでしょう…

おとなりのメグちゃんのお家で……冷たい…タムに、さわってから……マリちゃんはずっと泣いていました。わ～んわ～ん…大きな声で…泣き続けてるんです……

……だって…泣きたいんです。なんだか、よく分からないけど……ずっとずっと、泣き続けたいんです……

ユウタは、お父さんとお母さんが、そんなマリちゃんをなぐさめようとしているのを、じっとだまって見ていました。

…でも、お母さんもお父さんも、マリちゃんをしばらく、そのままにしておこう、って…

でも…でも、ユウタはそれでいいとは思いませんでした。

「マリがしっかりしないと、メグちゃんはずっと泣き続けるじゃないか。サトミだって、あんなにがんばってるんだぞ！」

……えぇ、そうです。サトミだって、泣いていたんです。

でも、ちょっと泣いた後で…すぐに、サトミはメグちゃんをなぐさめ始めていました……

メグちゃんの、すぐそばで……時々、泣きたくなるのを…一生懸命、がまんして……

……くちびるを強くかみながら、震えている…そんなサトミを見ているのは……ユウタにとって、とても辛いことでした……

…ユウタだって…メグちゃんを、なぐさめてあげたいんです。

でも…自分になんて……何もできないように、思えるんです……

…でも…でも、こんな時に、大好きなお友達がそばにいてくれたら……一緒に泣いて…でも、一生懸命、はげましてくれて……

そんなお友達が、今のメグちゃんにはとても必要なんだ、って……それだけは、分かっているつもりでした。

えぇ…もちろん、それだって…サトミほどの力にはなれません。だって、サトミは、お友達なんかではなく「お姉ちゃん」なんです。やっぱり、そこには何かの《差》があると思います…

……そして……
…ユウタは、そんなサトミよりはもちろん、お友達なんかよりも
…もっともっと…その《差》が大きいんです……
……そんなユウタに……何ができると言うのでしょう……
「…だって…！　お兄ちゃん、だって…！」
泣きながら、マリちゃんは叫んでいました。
マリちゃんだって、もちろん、メグちゃんのことは心配なんです。
だって…きっときっと…マリちゃんなんかよりも、もっと…もっと、メグちゃんの方が悲しいんですから……
……四つのマリちゃんにとって…こんなこと……初めてでした。
昨日まで…確かに、タムはきゃんきゃん！　って……
……元気に走り回っていたんです…
…なのに…それなのに、今日は、もう…冷たくって……ぬれたタオルみたいに…なっていたんです……
もう……絶対、動かないんだ、って……
…そんなこと、急に言われたって…信じられません。
…だって……
……タムは、タムのままなんです。何も、昨日と変わってなんかいないんです。
……ちょっと…冷たくなっただけで……きっと、すぐに、また…あったかくなって…一緒に、遊べるはずです……
……いいえ…
……いいえ……でも…やっぱり……
……分かるんです。
サトミお姉ちゃんや、お兄ちゃんが泣いたんです……
…きっと…やっぱり……
本当に……
……そんなのって、ないです…！
…どうして…どうして……
「分かった。じゃぁ、マリは一人きりで泣いたらいいだろ！

僕は、メグちゃんのところに行くからな」
「…え…？」
……いや…一人になんか…なりたくない……
だって……このまま…お兄ちゃんがいなくなって…
……明日、タムみたいに…冷たくなっていたら……
「いやっ！　いやっ！　一人はいやぁっ！」
大声で泣きながら…マリちゃんは、お兄ちゃんにしがみついていました……
…ユウタはそっと、マリちゃんを立たせると…一緒におとなりに向かい始めました。
…こんな自分なんかに…何が、できるのでしょう……
……いいえ…何もできないと思います…
でも…でも……そばにいた方が…いないよりも、いいのかもしれません……

「…ユウタくん……」
メグちゃんの部屋に入ったとたん…サトミはほっとした表情で、ユウタを見上げてきました。
……えぇ…これだけでも、来てよかったのかもしれません……
「…メグちゃんっ！」
しっかりとつないでいた、お兄ちゃんの手をぱっ！　と放して…マリちゃんはメグちゃんにかけよりました。
…ベッドに顔をふせているメグちゃんに抱きつくと…声を上げて、泣き始めています……
…メグちゃんは……とっても小さな…本当に、とっても小さな肩を震わせて…声も出さずに、泣いています……
……きゅっと毛布をにぎりしめて……一生懸命…でも、静かに泣いてるんです……
「サトミ…」
声をかけると、サトミは力なく笑い返してきます…

……こんなにも弱気な…さみしそうなサトミを……ユウタは、初めて見ました……

…『何か』が、こみあげてきます……

……サトミも、だまっています…

……その目が、そっと閉じられて…静かに、涙がこぼれ落ちても……ユウタはぎゅっ！　と手をにぎりしめて、泣くのをがまんしました。

「…メグちゃん……」

ベッドに頭をのせているメグちゃんの横に…ゆっくりと座り込みます。

目の前で、マリちゃんもメグちゃんも…小さな体を一生懸命に震わせて、泣いています……

…自分には…何が、できるのでしょうか……

「…メグちゃん…

…一緒に遊んでいる時のタムを…覚えてる…？」

……もちろんです…！

…今だって…ほら……！

見えるんです。…マリちゃんと一緒に、笑いながら…三人で追いかけっこしてるんです……

ほら…

…ね？

…きゃんきゃん、って…楽しそうに、見上げてくれるの…

「ちっちゃくて…まっ黒なんだよね……目が、とってもキラキラしてて……」

えぇ、そうです……ほら…ね…？

「ユウタくん……」

こんなにも辛いのに……タムを…思い出させるなんて…

サトミはそう思ったんです。

…でも、ユウタくんはそんなサトミをにらみつけていました。

その目が…涙で光っています……

…そうです…ユウタくんだって、辛いんです……
……それ以上、サトミには何も言えませんでした…
「かわいい声だよね…タムって…」
えぇ…すぐそばで、ほら…
…うれしそうに…はしゃいでいます……
「聞こえる…？　メグちゃん……」
…小さな頭が、ちょっとだけ…本当に、ちょっとだけ、動きました。
「……お兄ちゃん…？」
いつのまにか、マリちゃんが泣きやんでいます。
でも、ユウタはただ、メグちゃんだけを見続けていました。メグちゃんだけに、ささやいていたんです。
……ユウタには見えていました。バラバラになったジグソーパズルのように…こわれてしまったやさしい心が……
えぇ…見えていたんです……
「…マリちゃん…」
そっと…サトミはくちびるに指を当てながら、マリちゃんの小さな体を引き寄せました。
…その目は、じっとユウタを見つめています……
でも、そんなサトミの想いすら、ユウタは気が付いていませんでした。
「指先をなめてきてね…とっても、温かくて…」
えぇ…
「ちょこちょこ動き回るくせに…ボールを取り上げたら、お座りをして待ってるんだ…いつまでも、いつまでも…」
…えぇ……
「メグちゃん…
…メグちゃんにも…タムは見えるかい？」
……えぇ……！
目をきゅっ！　と閉じて、毛布に顔をうずめたまま…メグちゃん

は声も立てず…でも、また、ちょっとだけうなずきました。
…もちろん、ちゃんと、見えています…
ほら、…ね…？
そこに…そこに……
「じゃぁ…やっぱり、そうなんだ」
…え？
……ユウタお兄ちゃんの声…ちょっぴり、うれしそう……
「……」
「メグちゃん…タムはね、どこか知らないところに行ったんじゃないんだよ」
「……」
「タムはね、オカシナ村に行ってしまっただけなんだ」
「……！」
目の前で…大きく、びくっ！　と…メグちゃんの体が震えています…
「…今、メグちゃんはね…オカシナ村のタムを見てるんだ。
タムは…どこか知らないところに行って…恐くて、くんくん泣いてるんじゃないんだ……
そうだろ…？　ほら…」
…えぇ…怖がってなんて…いません…
「ちゃぁんと、オカシナ村のメグちゃんがお散歩に連れて行ってくれるし…
オカシナ村のマリと一緒に、おいかけっこもしてるんだよ……」
（……！）
メグちゃんが…メグちゃんが、そっと…毛布から、顔を離したんです…！
でも…その目を上げることは、できません…
…ちっちゃな…本当に、ちっちゃな体が…かすかに、震え続けています……
（がんばって…メグ、がんばって…）

どうして、自分は何もできないのでしょう……
…いいえ、…いいえ、そうです。できることがあります。
お祈りをして…そして……
……ユウタくんを信じることです。
サトミはマリちゃんをきゅっと抱き締めながら…心の底から、お祈りをしていました……
…でも、ユウタくんは…そんなメグちゃんの変化にも、気付いてないみたいです。
…いいえ、もう…何も、見ていないみたいです。
「あんなかわいいタムが…死んで…どこか知らないところに行ったりするもんか…
…ちょっと…ちょっとだけ、オカシナ村に迷い込んでしまったんだよ。
今まで、オカシナ村のメグちゃんは、タムみたいな仔犬とお友達になったことがなかったから…きっと、ずっとずっと、タムと遊んでみたかったんだろうね…」
ゆっくりと…静かに、メグちゃんが顔を上げていきます…
ぬれた大きな瞳が、じっと……大好きなユウタお兄ちゃんを見上げて……
「大丈夫だよ。絶対、オカシナ村のメグちゃんだって、メグちゃんと同じくらい…タムをかわいがってくれるよ。
それにね、オカシナ村のメグちゃんは…自分がタムとお友達になっている間、メグちゃんがさみしくないように、って…プレゼントもくれたんだ」
「…？」
「だってほら、今、メグちゃんの目にはタムが見えてるだろ？　本当なら、オカシナ村のタムには、夢の中でしか会えないはずなのに…
目を閉じるだけで、楽しそうに遊んでいるタムが見えるのは、ありがとう、って…オカシナ村のメグちゃんが、プレゼントしてくれた力なんだよ。

ほら、メグちゃん…見えるだろ？」
…ちょっとだけ…また、目を閉じてみます……
…えぇ、見えます。見えますとも。大好きなユウタお兄ちゃんが言ってくれたように……
……今までよりも、ずっとずっと、いたずらっぽい目をクルクルさせて…タムが見上げています…
「だから、ね…ちょっとだけ、オカシナ村のメグちゃんに、タムをかしてあげたらどうだろう…
タムだって、ほら…それを楽しんでるみたいだろ…？」
…えぇ…とっても、いたずらっぽい目をしています……なんて悪いタムなんでしょう…
「もう泣かなくたっていいんだ。本物のタムは、ちゃぁんと、オカシナ村で遊んでるんだから。メグちゃんが見つけたタムは、タムがいたずらして残していった、にせもののタムなんだよ…」
「……と…」
（メグ…！）
…かわいいくちびるが、かすかに動いています…！
でも…声は出ません。
…どうしたら声が出るのか…今まで、忘れていたのです…
「…ほ、ん…とう……？」
メグちゃんには、とっても辛い言葉です…
…だって、大好きなお兄ちゃんですもの…信じているんですもの……
ユウタは、そんなメグちゃんの気持ちを、真剣に受け止めていました。
「本当さ。メグちゃんだって、見ただろう？」
しっかりと、力強い言葉が聞こえてきます…
大好きなお兄ちゃんは…その時、初めて……メグちゃんの目を見つめてくれたんです……
…ごめんなさい……

つぶらな瞳に、みるみる涙があふれてきます。
次の瞬間、ユウタはとびついてきたメグちゃんを、しっかりと受け止めていました。
……震えながら…声を上げて、泣いています……大きな声で…泣いています……
……パズルは、まだ、散らばっています…
…でも、ユウタには、そのパズルをどうやって元通りにすればいいのか、もうちゃぁんと分かっていました。
「ほら、メグちゃん…」
自分に出せる、精いっぱいの力を込めて…ユウタはメグちゃんを支えてあげました。
「タムが心配してるよ」
そっと、ささやいています…
「……ユウタくん…」
……何を言えばいいのでしょう…
…サトミは、あのままメグちゃんが死んでしまうんじゃないか、って…本当に、そう思って……
でも…もう、大丈夫です。サトミにも、もう分かっていました…
…えぇ、メグちゃんは大丈夫です。大丈夫ですとも……
「……ありがとう…ありがとう……」
うれしくって…なのに、涙がどんどん、あふれてきます……
…ユウタくんは、何度も何度も、うなずいてくれていました……

……

次の日の朝、メグちゃんはいつものように、ちゃぁんと起きていました。
一番に、カーテンを開けます。
「…うわぁ…」
とってもきれいな…とっても、とってもきれいな青空が、広がっ

ています。
大きくて…高くて、青い空です。
…なんだか、ドキドキしてきます。
うれしくなって、ぴょんっ！　とその場で飛び跳ねると、くるっとメグちゃんはお部屋の中を振り返りました。
お部屋の向こう側には、ちっちゃな鏡が壁にかけられています。
かわいいその鏡には、でも…メグちゃんの姿は映っていません…
…そこには、ただ青空だけが…どこまでも深い、青空だけが…ずっと、広がっていました……

『鏡のなかの青い空』おわり

8．コスモスのタネ

「ほら！　ターくん、行くぞ！」
「あっ、ちょっと待ってよ」
給食を食べ終わると、すぐに、カズくんは運動場に向かって走り出しました。
あわてて、ターくんもそのすぐ後ろを追いかけていきます。
小学校も三年目になって、カズくんはすっかりわんぱくになっていました。ユウタくんよりも、もっともっといたずらっ子だ、って…サトミお姉ちゃんが大げさになげいたくらいです。でも、カズくん自身は、自分はまだまだお姉ちゃんよりもおとなしい、と思っていたのですが……
カズくんにとって、こんなにも晴れている今日は、ドッジボールをしなくてはいけない日でした。
楽しくドッジボールをするためには、もちろん、一番いい場所をとらなくてはいけません。そして、それはカズくんの役目なんです。だって、そんなふうに、カズくん自身が決めたんですから。
でも、そこはやっぱり三年生です。学年では一番わんぱくなカズくんでも、いい場所はどうしても上級生にとられてしまいます。
「ターくん、早くっ！」
ほら、あそこ！　運動場のすみっこですが、まだだれもとっていません。ずいぶんと、広い場所です。
追いついてきたターくんや、他のみんなにその場所を守ってもらいながら、コートを描き始めます。スニーカーのつま先で、なるべくまっすぐになるように…
「ねぇっ！　もうちょっと、向こうにいってよ！」
急に、女の子の大きな声が晴れた空に広がります。
わざわざ目を上げて探さなくても、カズくんにはその声がだれだかよぉく分かっていました。

……本当に、うんざりです。
おとなびたため息をつくと、カズくんは顔を上げてその女の子をにらみつけました。
二年生の女の子の集団が、みんなと言い争っています。
「場所、とりすぎじゃない！」
その集団の、先頭に立っているのは……えぇ、えぇ、うんざりするほどよく知っています。
…だって、マリちゃんなんですから。
このごろ、マリちゃんはとっても生意気になったと思うんです。きっと、サトミお姉ちゃんのせいなんだ、ってカズくんは信じていました。
何でもないことでも、すぐにけんかをしてしまいます。それこそ、会えばいつでもけんかをしているかも知れません。
でも、もちろん、カズくんの方が一つ年上なんですから、すぐに怒り出したりはしません。今だって、そうです。
「そっちこそ、もっと向こうで遊べばいいじゃないか」
それでも、ムッとしてしまうのは仕方ないと思うんです。
「だ〜め！　サッカーをしてるそばだもん。危ないじゃない」
「だったら、教室で遊べばいいだろ」
なるべく、静かに言ってるんです。だって、お兄ちゃんなんですから。
「だったら、カズくんが教室で遊んでよ」
でも、マリちゃんはこんなふうに言うんです。生意気だと思いませんか？
それに…えぇ、そうです。マリちゃんは、カズくんのことを「カズくん」と呼ぶんです。みんなの前で、年下の女の子にこんなふうに呼ばれるなんて…恥ずかしくて、とても腹が立ちます。
でも、もちろん……えぇ、お兄ちゃんなんですから。ちゃんと「マリちゃん」って、やさしく言わなくてはいけないと思っています。
「マリちゃんが、後から来たんだろ？　なんで、先に来てた俺達が、

教室に戻らなくちゃいけないんだよ」
でも…いくらお兄ちゃんだとしても、限度、ってあると思うんです。もう少ししたら…きっと、カズくんはお兄ちゃんらしく、なんてしていられないと思います。自分でも、分かるんです。
「だったら、ちょっとでもいいから、場所を分けてよ。コートも、そんなに広くなくてもいいでしょ？　運動場は、みんなのものなんだから」
…不思議なことです。
こんなふうに、カズくんがお兄ちゃんらしくなれなくなりそうになると…急に、マリちゃんがおとなしくなることがあるんです。
こうなっては、カズくんも怒れません。…もしかすると、マリちゃんは、そんなことだって分かってるのかも知れません。
時々、マリちゃんのことが、本当に分からなくなってしまいます。
「…じゃぁ、ちょっとだけコートを小さくしてやるよ」
えぇ、今日の人数なら、確かに、もう少し小さくはできます。
「けど、ボールが当たっても知らないからな」
「ムリに当てたりしなかったら、別にいいよ」
「そんなこと、するもんか！」
ちょっぴり、ムッとしてしまいます。
カズくんはさっさと背中を向けると、コートの続きを描き始めました。もちろん、約束ですからちょっとだけ小さくしています。なんだか、斜めにひしゃげている気もしますが、まぁ、いいでしょう。
じゃんけんで、チームを分けます。でも、ドッジボールの強い子が一つのチームに集まったので、カズくんはメンバーを少し入れかえました。
だれも、文句なんて言いません。カズくんは、絶対、不公平なことなんてしないんですから。
「よぉし。じゃぁ、始め！」
自分はコートの外に出ながら、カズくんは大きな声を上げました。
「あれ？　中に入らないの？」

不思議そうなターくんに、カズくんはちょっといばってみせました。
「もちろんさ。一番強いやつは、外に出ておくもんだぞ」
そう言って、コートのはしまで走って行きます。
カズくんが立つすぐ後ろでは、二年生の女の子たちが遊んでいました。
そばで、マリちゃんがとっても長いなわをグルグル回しています。そのなわをくぐっていく女の子たちの中には、おとなしいメグちゃんの姿もありました。
二年生になってから、とっても残念なことに、マリちゃんとメグちゃんはちがうクラスになってしまったんです。
でも、こうして、休み時間にはいつもいっしょに遊んでいました。
…メグちゃんにとっては、この時間が……学校に来ている中で、一番楽しい時かも知れません……
……カズくんにだって、それくらい分かります。恥ずかしがり屋さんのメグちゃんには、マリちゃんといっしょに遊べるこの時間が、とっても大切なんです。だから…だから、マリちゃんのわがままにだってつきあってあげるんです。
あっ、ほら。ボールが飛んできます。もう、マリちゃんやメグちゃんのことなんて、考えていられません。大いそがし、です。
…すぐに、カズくんはドッジボールに夢中になってしまいました。
マリちゃんが大きく腕を回しながら、そんなカズくんを、時々、ちらっと見ています。
「…マリちゃん……かわる…？」
ちょっと、腕がつかれてきたんです。そのことに気が付いて、メグちゃんが声をかけてきてくれます。
「ううん！　平気だよ」
でも、元気に答えてみせます。
「あっ！」
「あぶないっ！」

急に、背中の方から叫び声が聞こえてきます。
「え？」
思わず、マリちゃんが振り返って…
「えぇっ！」
だって…だって、すぐそこに、大きなボールが……！
「マリちゃん…！」
メグちゃんは恐くなって…どうしようもなくて、きゅっと目を閉じてしゃがみこんでしまいました。
マリちゃんも、目を閉じようとして……
「おっと」
その時、だれかがすぐ前に立ってくれたんです。
…とっても、大きな人……
……その人は、ちゃんとボールを受け止めてくれていました。
「だから、危ないって言っただろ？」
そんな、あきれた声がします。
「…あ……」
その人は、カズくんだったんです。
…カズくんが、あんなにも大きい人だったなんて…ちっとも知りませんでした……
「で…でも、受けてくれたじゃない」
当たらなくて、ほっとしているのに…生意気にも、マリちゃんはそんなことを言ってくるんです。
「あのなぁ…」
ますますあきれてしまったカズくんに、マリちゃんはにこにこしながら続けてきました。
「だったら、どうして中に入らないの？」
何度も、相手にボールを当ててるんです。マリちゃんはちゃぁんと、それを見ていました。外からボールを当てたんですから、すぐにコートの中に入れるはずです。
そんなマリちゃんの言葉に、カズくんはびっくりしてしまいまし

た。
…でも、すぐにいたずらっぽく言い返します。
「マリちゃんこそ。いつまで、コートの近くでなわを回してるんだよ。かわってもらった方がいいんじゃないのか？」
……でも、にこにこするだけで…マリちゃんは、何も言いませんでした。
しばらくそうしてお互いを見ていた後、二人はにっこり笑いながら背中を向けあいました。
……えぇ、二人とも、よぉ～く、分かっていたんです。
だって、二人とも、本当にわんぱくで、生意気で、おませさんで……そして、とってもやさしかったんですから。

……

その日は、カズくんのお誕生日でした。
ターくんやユウタくんにお祝いしてもらった後、夕方になってカズくんは一人で縁側にすわっていました。
足をぶらぶらさせながら、お庭をじっと見ています。
…じつは、カズくんには、だれにもおはなししていないヒミツが一つだけありました。
それは、こんなふうに、一人で木や、草や、お花を見ることが好きなんだ、ってことです。えぇ、ただそれだけのことなんですが、三年生の中で一番わんぱくな自分がそんなことを好きだなんて…なんだか、だれにも知られたくなかったんです。ターくんにだって、です。
もっと今より小さかったころ、ユウタくんに教えてもらったことがあります。
……きれいなお花や大きな木には、妖精が住んでるんだ、って。
オカシナ村の、そのおはなしを聞いてからでしょうか。カズくんは、お庭の草木を見ていると、本当にだれかが住んでるような気が

してくるんです。
…ほら。緑色の透き通った葉っぱが、一枚だけ、風もないのに大きく揺れています。夕方のとってもまぶしい日の光に、きらきらと輝いて……なんだか、笑ってるみたいです。
ちゃぁんと、あの葉っぱだって生きてるんです。ただ、一人では歩けないだけなんです。
でも、カズくんにはきらいな木もありました。それは、お庭の中の大きな松の木です。とっても大きな木で、橋からだって見えるくらいです。でも、みんなが言うようには、すごいとも思いませんし、ちっとも好きになれないんです。
だって…あの木が、大人たちが、よってたかって作り上げた…おもちゃに見えてしまうんです。
…ぐいっと首を横に曲げられて……もう、あの松の木は死んでしまっています。…「りっぱな松の木ですね」だなんて…とってもひどいと思います。
そんな松の木よりも、カズくんが好きなのは小さなお花でした。コスモスやナノハナ、それにスミレ…かわいらしいお花がお気に入りなんです。じっと見ていたって、あきることなんてありません。
…このちっちゃなお花の一つ一つに、きっと、かわいい妖精が住んでるんです。
……ほら…ちょこっと顔をのぞかせて……笑いかけてくれます……
こんな時のカズくんを見たら、絶対、学校のみんなはびっくりすると思います。あんなにもわんぱくで、力の強いカズくんが…って。
でも、それっておかしいと思うんです。わんぱくで、元気で、いたずらっ子だからって、どうしてお花を好きになったらいけないんでしょう。どうして、妖精を信じたらいけないんでしょうか…
…きっと、オカシナ村なら、おかしくなんてないんです。こんなふうに、ヒミツにしなくたっていいんです……
……時々、カズくんは…ちょっぴりさみしい気分で、そう思うことがありました。

…今、庭先では、とっても明るいナノハナが輝いています。
こんなにきれいなものを、見ようともしないなんて…本当に、みんな、損をしてると思います。
その時、ふと、ぼんやりしているカズくんの頭の中に、マリちゃんの顔が浮かび上がってきました。
…えぇ、こんなことがお似合いの、メグちゃんの顔じゃありません。マリちゃん、なんです。
マリちゃんに、このヒミツを教えたら……
……いいえ、ダメです。絶対に、教えられません。
…でも……
なんだか、困ってしまいます。マリちゃんにヒミツを教えない自分が、とっても弱虫に思えてきたんです。
カチャ…
「ん？」
門の方で、何か小さな音がしました。郵便屋さんでしょうか。
ぴょんっ！　とお庭に飛び降りて、急いで郵便受けまで走って行きます。
…でも、おかしいんです。いつもは聞こえるエンジンの音が、今はしていません。郵便屋さんじゃないのでしょうか。
首をかしげながら、カズくんは郵便受けをのぞきこみました。
でも、ほら。やっぱり、何か入っています。
「何だよ、これ」
取り出してみると…それは、くしゃくしゃになった紙袋でした。
…あっ、文字が書いてあります。とっても幼い字で…
『おめでとお　マリ』
って……
カズくんはびっくりして、あわてて門の外に飛び出しました。
でも…もう、どこにもマリちゃんは見えません。
急いで、紙袋を開けてみます。
……出てきたのは……もっともっと、カズくんをびっくりさせま

した。
…だって……中に入っていたのは、お気に入りのコスモスのタネだったんです！
どうして…どうして、マリちゃんはコスモスのお花が好きなことを知っていたんでしょう。
絶対、分かるはずがないのに……
……でも……でも…なんだか、うれしいんです。ふわふわっ…とした、あったかい毛布にくるまれたみたいです。
さっそく、このプレゼントをまこうと、カズくんは急いでお庭に戻りました。
…どこが、いいでしょうか…
……決めました。大好きな、ハナミズキのそばにしましょう。
きっと……秋には、かわいいお花が咲くはずです。あわいピンクのお花が風に揺れるころ…えぇ、そのころには、マリちゃんも呼んであげなくてはいけません。
そうですとも。どうして知られたかは分かりませんが、でも、もうこのヒミツはカズくんだけのものじゃないんです。カズくんとマリちゃんの、二人のヒミツなんです。

ゆらゆらと揺れるコスモスのそばで、きっとカズくんは見付けるはずです。
ちょっとおませで、生意気な…でも、とってもかわいい女の子の妖精を……

『コスモスのタネ』おわり

9．光の風

「ねぇねぇ、サトミ…！」
後ろの席から、こそこそっと声が聞こえてきます。
「何よ、綾音（あやね）」
カバンの中からお弁当を取り出しながら、サトミは首だけ後ろに振り返りました。
「えっと…その、ちょっと、教えてよ」
「…？」
綾音は声を潜めて、教室の隅に集まっている男の子達を、そっと指差しています。
何が言いたいのかよく分からなくって…そんな彼女の様子に、サトミはきょとんとしてしまいました。
「あのさ…その…」
珍しく、言い淀んでいます。
ますます困惑していると、やがて彼女は意を決して囁いてきました。
「あのさ、武村君って、好きな子とかいないの？」
「ユウタくんに好きな子？」
思わず、吹き出してしまいます。
「へぇ～、綾音って、ユウタくんが気になるんだ」
お弁当なんて、もうどうでもよくなっています。サトミは体を後ろに向けると、彼女の目を面白そうに覗き込みました。
「べ、別にっ！」
慌てて、目を逸らしています。そんな友達の姿に、サトミは優しくにっこりと微笑んでいました。
綾音は、サトミが中学生になった時に、初めて声を交わして相手です。それからずっと、彼女はサトミの大切な友達でした。
その綾音が、ユウタくんを気にしていたなんて…

…えぇ、そうです。ユウタくんも、中学生になってからずっと、二年生になった今でもサトミと同じクラスでした。小学校の頃からずっとそうだったので、不思議とも思っていませんでしたが…確かに、ちょっと珍しい事かも知れません。

「心配いらないよ。ユウタくんに、好きな子なんていないと思うから」

サトミも、ちらっと教室の隅に目を流します。

男の子の集団の中心で、ユウタくんが何かを楽しそうに話しています。ゲームの話でもしているのでしょうか…

…何だか、そんな集団に、オカシナ村のお話をしてくれたユウタくんや、自分達の幼い姿が重なります……

「そうなの？　本当に？」

急に熱心になって聞き返してくる正直な綾音に、サトミは必死に笑いを堪えながら頷きました。

「だって、この前も『自分のための時間の方が大切だからな』って。『女の子に時間を縛られたり、その子のために優先的に時間を使ったりするなんて、バカらしいじゃないか』って、言ってたよ」

「えぇ～、それって、強がりじゃないの？」

「試してみる？」

ユウタを一番よく知っているサトミは、いたずらっぽく言いました。

「サトミ！」

「ごめん、ごめん」

一瞬脹れた綾音も、次にはサトミと一緒に笑い出していました。

「…でも、ショックだなぁ。それって…ね。その……しても、ムダじゃない？」

ぼそぼそっと、小さく呟いています。サトミは、そんな綾音に、ちょっと困った顔で頷いていました。

「そう…かもね。でも、告白しないよりは、いいんじゃない？」

「ちょっと、サトミ！　そんなにはっきり、言わないでよ」

真っ赤になって、慌てて周りを見回しています。
「…聞かれたらどうするの！」
「ごめん、ごめん」
ちょっぴり気の毒になって、サトミは素直に謝りました。
「……それとね…その……」
「ん？」
「…ちょっとね。…もう一つ、気になる事があって…」
とっても真剣な目です。サトミも笑みを収めて、真面目な顔で綾音を見詰めました。
「あのね…気を悪くしないでよ？
…武村君、ひょっとして…そのね、サトミの事が好きなんじゃないかな、って……」
「えぇ～っ？」
慌てて、首を大きく左右に振ってしまいます。
…でも…どうしてでしょう。
……頬が、火照ってくるんです……
「そ、そんな事、絶対ないよ！」
「でも…でもね、ごめんね？
ずっと、隣に住んでて…幼なじみなんでしょ？　そういうの、ちょっと憧れるし…やっぱり、好きになったりするんじゃないかな、って……」
「そんな事、ないって。
…だって……」
少し…言葉をとぎらせてしまいます。
…だって…まだ、やっぱり、ちょっと寂しくなるんです……
「…私が、高田君と付き合っても…その……ふられて、も……
……何も、言ってくれなかったし…ね……」
「あっ！　ごめん、サトミ…思い出させちゃったね…」
目の前で、綾音がシュンとしてしまっています。
笑ってあげようとしても…でも……サトミだって、寂しくて…

…やっぱり、笑えません。
「ごめんね…」
「ううん…
…だから、ね。絶対、ユウタくんが私を好きだなんて…そんな事、ないよ」
そう言いながら…何かが、ちょっぴり胸の辺りでモヤモヤと動いています。
…温かな寂しさが…新たに、そこから体中へと広がっていきます……
……えぇ。…ふられた日、ユウタくんは、何も言ってくれませんでした。付き合い始めた時だって、何も言ってくれなかったんです。
励ましてくれるとか…いいえ。笑いながら、いたずらっぽく、からかってくれるだけでも…
…『何か』を、期待していた気がします。
でも…えぇ、何も言ってくれなかったんです……
「さっ！　もう、こんな話は止めよ？　ごめんね、サトミ」
「え？　…あっ、ううん、ありがとう」
急いで目を上げて、にっこりと微笑みます…
机を動かして、二人は向かい合ってお弁当を広げました。
…でも、…サトミは、自分が綾音と何を話しているのか…何だか、よく分かりませんでした。
……確かに、ふられた日、ユウタくんは何も言ってくれませんでした。
でも…手紙をくれたんです。あれを、手紙と言えれば、の話ですが…
中に書かれていたのは、ユウタくんがよくお話してくれた、オカシナ村のお話なんです。
サトミは、近所のみんなと一緒になって、そのオカシナ村のお話を聞くのが大好きでした。お話をしている時のユウタくんは、本当に愉しそうで…ステキだったんです…

沢山あったお話も、全部、覚えています。…そう言えば、よくサトミを主人公にしたものもありました。
…もらった手紙のお話も…サトミが主人公になっていたんです。
（あの手紙、何処に仕舞ったかなぁ…）
ぼんやりとしながら…いつしか、サトミは部屋に射し込む春の光と、吹き込んでくる柔らかなそよ風に包み込まれていました……

……

その日、サトミは部屋の中で、ずっと机に突っ伏したまま哭き続けていました。
去年の秋に…告白して……たった半年で、高田君にふられたんです……
…ショックでした。どうしてか、なんて…そんな理由なんて、どうでもいいんです。…ただ…ただ、悲しくて……
中学校に入って、初めて好きになって…あんなに、あんなに好きになって……
…とっても楽しそうに…笑ってくれてたんです。ずっと…ずっと、一緒に笑いあっていけるんだ、って……

開け放たれた窓からは、温かな春のそよ風が入り込んできます。
…でも…心の中までは、温めてくれないんです。
……柔らかな光が、寂しそうに瞬いています……

優しい想いに包まれながら……
…でも、サトミは力を込めて泣き続けていました。体が張り裂けそうなくらい、力を籠めて……

コン…コン……
そっと…微かに、ドアが叩かれています。

……でも、サトミはその音を聞こうともしませんでした。
「…お姉ちゃん……」
とっても悲しそうな声がします…メグちゃんです。
大好きなお姉ちゃんが、こんなにも泣いているのを見て…メグちゃんが心を痛めないはずがありません…
…でも、今のサトミには、自分の事だけしか考えられませんでした。
メグちゃんだって、意地悪されてるなんて思いません。
それどころか…今、何も言えない自分が大嫌いになってしまうんです……
「お姉ちゃん…この、お手紙……」
澄んだ綺麗な声が、涙で震えています…
「…これ…ユウタお兄ちゃんが……お姉ちゃんに…渡して、って……」
でも…サトミは、メグちゃんがいる事なんて、ちっとも気が付いてないフリを続けています…
「……置いておくね…お姉ちゃん……」
すすり泣きながら…メグちゃんは手紙を床に置くと、そっと…静かにドアを閉めました……

……ずっと…サトミは泣き続けています……

……サトミがユウタくんの手紙に気が付いたのは、もう黄昏時でした。
西の空が、茜色に染まっています。燃えるような激しさを感じさせない…温かな腕を大きく広げ、ふんわりと抱き締めてくれるような優しい夕焼けです…
そんな柔らかな光に照らされながら…やっと、サトミは顔を上げたんです。
…ユウタくんは…何を、書いてきたんでしょう……

ふと、そんな事が気になったんです。付き合い始めた時も…いいえ、今日、ふられた事を知った時だって、何も言わなかったのに……こんな時にからかうような人ではない事を、サトミが一番よく分かっていました。

…だからこそ、気になったのかも知れません……

サトミは黙って立ち上がると、ちょっとふらつきながらドアの傍まで近付きました。

ユウタくんらしい、全く飾り気の無い封筒です…

その封筒を手に取ると、サトミは何も言わないまま、そっと封を切りました。

中からは、きちんと折り畳まれたノートの紙が、何枚も出てきます。

…一呼吸置いて……広げてみます……

学校から戻ってカバンを部屋に放り込むと、急いでユウタはマリちゃんを呼びました。

「どうしたの？　お兄ちゃん」

「ちょっと、メグちゃんを呼んできてくれないか」

「いいけど…でも、どうして？」

訳が分からず、マリちゃんはきょとんとしています。

「いいから！」

「何よ、教えてくれたっていいじゃない！」

ぷんぷん！　です。でも、怒りながらも、マリちゃんはおとなりにメグちゃんを迎えに行ってくれました。

ユウタは、きっと今、自分は変な顔をしてるだろうな、なんて思いながら、椅子に座り込みました。

…今日、あのサトミがふられたんだ、って聞いたのは、もう帰る直前だったんです。それを聞いた時、ユウタはちょっと心配になってしまいました。

勝ち気で明るく、小学校の時よりは落ち着いたけれども、相変

わらず男の子みたいなサトミでも…やっぱり大好きな男の子にふられたら、泣いているんじゃないでしょうか。
…気にしなくてもいいんじゃないか、って言われれば、その通りです。でも、そこはやっぱり、幼なじみなんです。生意気な女の子でも、大切な友達である事に変わりはありません。泣いているのなら、慰めてあげたいと思います。例え、自分一人では慰める事が出来なくても、理由を話してメグちゃんに手伝ってもらう事は出来るでしょう。
「…ユウタお兄ちゃん…？」
優しい、とっても綺麗な声が、ドアの隙間から覗き込んでいます。
「あっ、ごめん、メグちゃん。ちょっと教えてほしい事があるんだけど」
「……？」
大好きなお兄ちゃんに、自分みたいなちっちゃな女の子が、何を教える事が出来るんでしょう…
大きく澄み切った瞳は、純粋な問いかけを宿してユウタを見上げていました。
「ちょっと、入ってきてくれるかい？」
そんなメグちゃんを手招きして、部屋の中に入ってもらいます。
「はい…」
はにかんでいるメグちゃんに椅子の傍まで来てもらうと、ユウタはそっと尋ねました。
「ちょっと、教えてもらいたいんだけど…その…サトミ、今、どうしてる？」
「…え…？」
きょとんとしながらも、メグちゃんは素直に続けていました。
「…えっと…綾音お姉ちゃんと、お電話してた……」
これでは、よく分かりません。…でも…やっぱり、泣きながら

話をしてるんでしょうか…
「…で、その……う～ん……」
「…ユウタお兄ちゃん…？」
メグちゃんは、困ってしまったみたいです。
でも…でも、こんな事を、メグちゃんに訊いてもいいんでしょうか。この優しい心の持ち主に……
…でも、気になるんですから、やっぱり、はっきり訊かなくちゃいけません。
……えいっ！
「…ねぇ、メグちゃん。それで、サトミの奴、その…電話しながら、泣いてたかな…」
「…え……？　…ううん、笑いながらお電話してた……」
「へ？」
何だか、拍子抜けしてしまいます。
ぽかんとしているユウタを、メグちゃんは黙ったまま首を傾げて見上げていました。
…どうして、そんな事を訊くの…？
そう言いたくても…でも、メグちゃんは決してそんな事を尋ねたりしません。
「ごめん、メグちゃん。どうしてこんな事を訊いたのか、教えられないんだ。わざわざ来てもらったのに…ごめんね」
「ううん…」
にっこりと、微笑んでくれます。その天使のような穏やかな笑顔に、正直にほっとしながら、ユウタは立ち上がりました。
「ほら、じゃぁ、一緒に帰ろうか」
大好きなお兄ちゃんに手を繋いでもらって、メグちゃんは真っ赤になって俯いてしまいました。
「……」
メグちゃんに合わせて、ゆっくりと歩いてくれます。本当に、ユウタお兄ちゃんは優しいんです。

そんなメグちゃんに笑いかけながら、ユウタはサトミと会って何を話そうかと考えていました。
笑っているなんて…どういう事でしょう。
それを、はっきりとサトミに訊きたいんです。
…でも…訊いてもいいんでしょうか…
「あれ？　ユウタくん、どうしたの？」
メグちゃんと一緒に玄関を抜けた途端、ばったりサトミと目があったので、ユウタはちょっと慌ててしまいました。
…どう見ても、サトミは泣いていません。…いいえ、悲しそうですら、ないんです。
若しかしたら、ふられた話そのものが、ウソだったんでしょうか…
「ごめん、メグちゃん。ちょっと、サトミと話がしたいんだけど…」
「…うん」
何も言わないで、メグちゃんは素直に、トコトコと二階の部屋に戻ってくれました。
「どうしたのよ、ユウタくん。何か、変だよ？」
「変なのは、サトミの方だろ？　高田の奴にふられたんじゃなかったのか？」
「あぁ～っ！　ひょっとして、心配してくれたんだ」
「当たり前だろ？」
ちょっとムッとしてしまいます。そんなユウタに、サトミはくすっと笑うと、可愛く肩をすくめて言いました。
「ごめん、ありがとう。
でもね、大丈夫だよ。私、そんなに弱くないからね」
「それは、よく分かってるけどな」
ほっとしている気持ちを、なるべく知られたくなくて…ちょっと横を向いてしまいます。そんなユウタに、サトミは真面目な顔付きで、続けていました。

「悲しくない、って言ったらウソになるけどね。
でも、好きだったのは、本当だもん。ふられたからって、好きだった想いがウソになるわけじゃないよ。私をふるような酷い人でも、今迄、ずっと好きだったんだから。
誰も、悪くなんてないよ。…ただ…ただ、ちょっと、違う方向に風が吹いてただけ。方角は同じだったんだけど、でも、ほんのちょっと、向きや位置、強さや速さが違ってたの。
泣いたりなんて、絶対、しないんだから。そんな事したら、折角好きになってた時間が、ぜぇ～んぶ、汚れてしまいそうだからね。楽しい事は沢山あったんだし、それは本当だったんだから。
好きになった心は、そのまま残してあげて…そして、よかったね、って褒めてあげるべきよ」
「……そうかもな。ふられても…例え、忘れられなくても、好きだった事、それ自体を悲しむ必要はないんだろうな。
二度と会えなくても、思い出だけは残り続けるし…『時間』に洗われても、『過去』そのものは消えたりしないんだ…」
「そうよ、全部、なくしたわけじゃないし、なくせるものでもないのよ」
笑いながらそう言ってるサトミを見て、ユウタも安心してにやっと笑いました。
「心配して、悪かったな。
じゃぁ、帰るよ。メグちゃんには、後で謝っててくれよな」
「うん、いいよ」
「じゃぁな！」
背を向けて、ユウタが玄関のドアに手を掛けた時…後ろから、そっと静かな声が聞こえてきました。
「ありがとう、ユウタくん…」
ユウタがちょっと振り向くと、サトミは胸元で小さく手を振りながら、にっこりと微笑みかけていました……

「…ユウタくん……」
静かな…青白い闇が、部屋の中まで満ちてきています。
…もう、字も見えなくなった手紙を…それでも、じっと見詰めたまま……
……サトミは、いつまでも…いつまでも、立ち尽していました……

次の日の朝、門を開けて、サトミはいつものように中学校に行こうとしていました。
その時、隣の門から見慣れた姿が飛び出してきたんです。
「ユウタくん！」
「ん？」
振り向いてくれた顔は…でも、何事も無かったみたいに、いつもと変わりません。
思わず声を掛けてしまいましたが…
「な…何でも、ないよ」
…何だか、急に、照れくさくなってしまって……俯きながら、サトミはそんな言葉を口走っていました。
「おいおい」
呆れ返った声がします……
…ちらっと目を上げると……でも、ユウタくんは、こんな自分に向かって、にやっと笑いかけてくれてるんです。
「ほら、遅れるぞ！」
何だか、嬉しくなってしまって…ふわっと、自然に微笑んでしまいます。
…昨日までの寂しさが、何だか、遠い事のように思えます……
いいえ。昨日までの事は、昨日までの事として、確かに大切に残っているんです。
「早く来いよ！」
「あっ、待ってよ！」

慌てて、走り出します。えぇ、珍しく、今日は寝過ごしてしまったんです。
…でも…だからこそ、こうしてユウタくんと逢えたんです……
サトミは、目の前の背中を追いかけながら……大きく、爽やかな空気を胸一杯に吸い込んでいました。
…えぇ、もう、大丈夫です。

……

「こら、サトミ！　聞いてる？」
「…え？　…あっ、うん。ごめん、何だっけ」
「もうっ！」
呆れた綾音の声に苦笑しながら…
……サトミは、今、確かに…自分を包み込んでくれる光に気が付いていました。
…温かな春のような、心地好い光の風を……

……これも、オカシナ村の魔法なのかも知れません。

『光の風』おわり

１０．オカシナ村の好きな夢

…そっと…静かに……

……澄んだ青空の許へと、足を踏み出します…

ホームに下りた途端、線路沿いに並ぶキンモクセイの薫りが、私を優しく出迎えてくれました。

……えぇ…本当に、優しいんです……

五年ぶりに包み込んでくれた…その、甘酸っぱい漣は……

…でも、私には…悲しみしか、運んで来てはくれませんでした……

……《本当》に…とても、苦しくて……切ないんです…

…どうしても重くなってしまう足を…私はそれでも、一生懸命に引き摺って、歩き始めました。

古びた木造の駅舎を抜けて、誰もいないタクシー乗り場へと出ていきます。

ぼんやりと…白い光に包まれた、その乗り場を回って……静かな一本道へと流れ込んだ私の目に、次々と見慣れた店構えが甦ってきました。

…ほら、あの薄暗い、汚れた引き戸の文房具屋さん。

あのお店には、よくメグやマリちゃんと一緒に買い物に行きました。可愛いシールや、ノートに鉛筆。縄跳びから、学校の体育館用のシューズまで。何だって、揃ったんです。

……あっ…

近くの路地から飛び出して、女の子が二人、文房具屋さんに駆け込んで行きます。
あの子達も…昔と同じように、柔らかい声のお婆ちゃんに、温かく迎えてもらうのでしょうか……

…また……少し、気が塞いでしまいます…
私が、あの子達くらいの年だったら…きっと……

……きっと、今はもう、走り出していると思います……

ちっとも進みたがらない足を叱りつけて…懐かしいお店の間を彷徨います…

まだまだ…お店が続く、その道の半ばで…左に。
…あっ、ほら。
すぐ右手に見える、まだ新しいお家は…えぇ、そうです。私が中学生だった頃に、火事があった所です。
あれは、晴れた日の夕暮れでした…燃えてしまったお家を見ていた、ターくんとカズくんを迎えに来た時……黒く炭化した柱を前にして、お爺ちゃんが茫然と立ち尽くしていたのを…今でも、はっきりと覚えています。
とっても辛くて……何だか、寂しくなってしまった私に……
幼なじみのユウタくんは、いつものように…『夢』のおはなしで慰めてくれました……

……そう、です……
…いつでも…どんな所でも、素敵な『夢』を見ていたユウタくんとは…高校を卒業するまで、ずっと……えぇ、ずっと、一緒だったんです。
こうして…五年もの間、離れ続けていたなんて……

……こんな、事……
……初めて…だったんです……
……ずっと……
…ずっと……私は、待っていたんです……
……えぇ……待っていた…はず、なんです……

小さく、溜め息を吐いて…私は、再び、歩き始めました……

角を曲がると…深く澄んだ空の下、金色に染まる田圃が広がっています。

…この蒼い天井は…本当に、何処までも続いていて……どれだけ、高い所にあるんでしょう……
いいえ…目の前の田圃だって……その重く垂れた稲穂は、とても遠く…でも、鮮やかで……
……思い出と現実が、一瞬、私の中で融け合います…
そう…ここは確かに、私が…私達が住んでいた町……

…そう言えば、この田圃に流れ込んでいる用水路の口では、いつも、たくさんのヤゴを見る事が出来たはずです。
他にも…
ほら。
田圃の向こうに、小さな林が見えてきました。
あの林の中には、ユウタくんが大切に守ってきた、秘密のため池が残っているはずです。
ため池の岸まで近付くのは、抜け道を知らない人にはちょっと難しくて…若しもユウタくんが教えてくれなかったら、きっと私はいつまでも辿り着けなかったでしょう。
でも、ユウタくんが道筋を教えてくれた御蔭で…マリちゃんやメ

グにザリガニを釣ってきてあげる事が出来たんです。ちょっと生臭くなってしまうのが困りましたが…でも、恐いのに、二人とも何度も見たがるんです。

あっ……

…もう、道が川にぶつかってしまいました……

こんな所まで来ているのに……それなのに、私は……

……まだ、どうすればいいのか分からないんです……

とっても遠くから…子供達のはしゃぎ声が聞こえてきます…

……寂しくて……泣きたくて……

…本当に、どうすればいいんでしょう……

もう、空なんて見えません…

…私は、俯きながら…川沿いを、左の方に曲がりました……

ひっそりとした…黒い壁のお家を通り過ぎます。

右手に流れている川は、五年前と同じで、ちっとも綺麗じゃありません。えぇ、ずっとずっと前から、この川はゴミでいっぱいだったんです。

…でも……

ユウタくんはちゃぁんと知っていて、おはなしの中で教えてくれました。

この…こんなに汚れている川でも、支流が流れ込む滝の下には、メダカの大群が泳いでいて……時には、蛇が川面をくねくねと渡って行ったんです。イタチも見かけましたし…カエルだって、たくさん住んでいました。

土手には狭くて細長い畑が作られていて…夏になったら、髪をはやしたトウモロコシが立ち並んで、そよ風に長い青葉を揺らせてい

たんです…

あぁ…

……どうしましょう…

……小さな橋が、もう、すぐそこに…

ここを渡れば……えぇ…私のお家は、すぐそこですし…

…その先には……

……ユウタくんの、お家が…あるんです……

…何だか、このまま…足が、動かなくなってしまいそうです…

本当に…どうしたらいいのか、分かりません…

……私は…いったい、何を言えばいいのでしょう……

私は…どんな『言葉』を伝えたいのでしょうか……

……足が…止まって、しまいました……

…この、白い橋には…幼稚園の送迎バスが、発着していました。

冬にもなれば、いつも、橋の欄干の上には、小さな可愛らしい雪だるまが幾つも並んでいたんです…

…雪だるま……

えぇ……今でも、よく覚えています……

……いいえ、忘れられるはずなんて、ないんです…

メグやマリちゃんの手伝いで、一生懸命だった私のために…ユウタくんは、大きくて素敵な雪だるまを作ってくれたんです……

私の雪だるま…ユウタくんが作ってくれた私の雪だるまが、みん

なのものと一緒に並んでいるのを見て……どんなに、嬉しかったか……

…なんて、素敵な想い出なんでしょう……
この澄んだ、黄金色の漣の中でなら…

私は……

…えぇ、私は……ユウタくんの言葉を……本当に…《本当》に、素直に喜んで、受け取っていたと思います……

……いいえ……

…今だって、きっと……その通りのはず、なんです。
ずっと…ずっと、待ち続けていたんですから……

えぇ…そのはず、です……

……足を、進めなくては……

…橋の向こうで、道は少し狭くなって続いています。
すぐに目に飛び込んできたのは、右手にある、カズくんのお家の大きな松の木です。その手前には、今でも広い空き地が5メートルはある高いフェンスに囲まれて残っていました。

…ふと、その空き地の前で、立ち止まってしまいます。

……いいえ……
もう…ちっとも、足が動いてくれないんです…

…これ以上、進めば……

不安、なんです…心配なんです……

…とても、静かな時間……

ゆっくりと…ゆっくりと……優しく、流れていきます……

…目には、フェンスの向こう側が見えています。

びっしりと、青草が群がっていて…むせるような、ムッとする濃密な香りがここまで届けられてきます。

この空き地は、私が幼稚園に行っていた頃、テニスコートになるはずでした。

でも、その計画も、いつのまにかなくなっていたんです。

フェンスの一部を切り抜いた扉には、小さかった頃にも見かけたように『危険、入るな！』の看板が掛けられています。

…えぇ、フェンスの向こうは、今も昔もちっとも変わっていません。

この空き地には、看板が書いているような危険な事なんて、何一つありませんでした。

ユウタくんだって、それが分かっていたから…だから、カズくんやターくんと一緒にこの中でいつも遊んでいたんです。小学生の頃、私はよくターくんのお母さんに頼まれて、みんなを夕御飯のたびに迎えに来ていました。

みんなはいつも、カズくんのお家のブロック塀に登って、そこから高いフェンスを乗り越えていたんです。ですから、さすがに私も、この中へは数えるほどしか入った事がありません。

でも、空き地の中にあるものについては、私は全部、知っていたんです。

…ほら、今も残ってるでしょ？

板壁が黒く汚れていて、屋根も半分以上傾けている古い作業小屋。空き地の奥で、高い草に囲まれているその小屋のすぐ脇には、桜の老木が大きく枝を広げています。
緩やかな風に揺れる、この木のお陰で、みんなは木登りも覚える事が出来ましたし、カミキリムシだって捕まえる事が出来たんです。
…えぇ、中になんて入らなくたって、私はユウタくんから全部、教えてもらっていました。
オカシナ村のおはなしでは、作業小屋は秘密のアジトになったり、絶海の孤島にある洞窟になったりしましたが、でも、それは紛れもなく、「ここ」にあったんです。

……本当に、静かです。

すぐ傍で、コスモスが…吹いていないそよ風に、ゆったりと身を任せています…
蒼く霞む天井からは…小春日和の暖かな光が、私をそっと包み込んでくれています……

……きっと…
…ユウタくんは、こんな時にいつも『夢』を見ていたのでしょう……

…いいえ……
私にも、見えています。

…七つの頃の小さなユウタくんや、五つになったカズくんにターくん…
みんな、小屋の中で楽しそうに笑っています。…あっ、ほら。迎えに来たボクに気が付いて……

……覚えています…
この日、ユウタくんは素敵なオカシナ村のおはなしをしてくれたんです……
…不思議な、『夢』のおはなしを……

……

うっすらと…小屋の中にまで、青い闇が忍び込んできます。崩れた屋根から覗く秋の空には、もう、鮮やかな茜色の毛布が広げられていました。その柔らかな毛布の上では、淡い薄雲が恥ずかしそうに頬を染めています。
…えぇ、そうです。ユウタには、もうお家に帰る時間なんだ、って、ちゃぁんと分かっていました。
仕方がありません。隊長は一緒にいた二人の部下に対して、重々しく命令を下しました。
「よし、いいか。宝物は奪い返したし、もうこんな島に用は無い。急いで脱出するぞ！」
「おぉっ！」
ターくんとカズくんが、勢いよく叫んでいます。隊長はそんな二人に満足そうにうなずきました。
あっ、もうすっかり暗くなっています。みんなが囲んでいる足の折れた机も、今では、ぼんやりとしか見えていません。
ユウタは孤島の基地に背を向けると、すぐに外へ飛び出そうとしました。
その時、急にフェンスの向こう側から、女の子の大きな声が聞こえてきたんです。
「ターくん、カズくん！　もう帰る時間よっ！」
サトミです。
男の子のように乱暴で恐いのに…こんな風に、小さな子どもの面倒だけは、よくみるんです。しかも、それが頼まれたからではなく

て、心の底からそうしたくて仕方がないみたいなんです。
生まれた時からサトミを知っているユウタにとって、そんなサトミの気持ちは一つの謎でした。
…いいえ。もちろん、いつでもサトミが乱暴だ、なんて言ってません。ただ、怒って追いかけてくるサトミと、こんな優しい気持ちのあるサトミとが、同じサトミなんだって事に、時々、戸惑いを感じてしまうんです。
そう言えば、もう一つ、気になる事があります。
今だって、ほら、そうです。サトミは自分からは、絶対にこの空き地の中に入ろうとしないんです。
別に、メグちゃんみたいに恐がってるわけではありません。だって、サトミはとっても勇気のある女の子で…時々、自分よりも強いんじゃないか、って思うくらいなんです。それにどうやら、ここへ来たがっているマリちゃんを止めたりもしているらしいのです。
確かに、女の子が来たら、とてもこんな遊びは……
…もしかすると、サトミは、この空き地を男の子だけの世界だ、って分かってくれているのかも知れません。普段の様子を見ていると、そんな事に気を遣うような女の子には思えないんですが…
幼なじみで一番よく知っていると言っても、ユウタにとって、やっぱりサトミは分からないところの多い不思議な存在でした。

……

…いいえ、《本当》は、ちゃぁんと分かってくれていたのかも知れません。
ただ、こんな風におはなしにする以外には、何だかうまく言えなかったのかな、って……
…ぼんやりと、そう思います……

……

小屋から出た三人を、夕陽色に染まったたくさんの草花が迎えてくれます。
ユウタはそのまま、サトミなんて気にしないでカズくんのお家に向かおうとしていました。
「わっ！」
その時、急にターくんが大きな声を上げたんです。
「ふぇっ」
ターくんが見ている先に目を向けて、思わずカズくんも変な声を出してしまいました。
「ん？」
ユウタは振り向くと、そんな二人の視線を追いました。
高いフェンスの向こうにある道の上で、大きな人影が夕日を背にして手を振っています…
……え？
…え、えぇ…そうなんです。「大きな」人影なんです……
どう見ても…その人は、「大人」でした。
…でも、黒く澄んだ瞳や、肩先で揺れている髪の毛は…見慣れた、サトミのものです。振り返ったユウタに向かって、胸元で可愛く手を振っている仕草や、ついさっき聞いた声だって……
……えぇ、絶対に、あの大人はサトミです。間違えるはずなんて、ありません。
あの人影は、ただ小学生のサトミが、大人の女性になってしまっただけなんです。
幼い二人がびっくりして何も言えない中で、でもユウタだけは、すぐに平気な顔で大きく手を振ると、その女性に叫んでいました。
「ちょっと待ってろよ！　すぐ、そっちに行くからな」
「うんっ！」
そのまま何事もなかったように、ユウタはカズくんのお家の前のフェンスを登り始めています。

カズくんとターくんも、それを見て慌てて後に続きました。
「ねぇ、ユウタくん。びっくりしなかったの？」
「もちろん、びっくりしたさ」
小さな声でたずねるカズくんに、ユウタはにやっと笑いかけました。
「でも、オカシナ村なら、急にサトミが大きくなったって、別におかしくないだろ？」
「う、うん…」
でも、ここはオカシナ村ではありません。
「あれは、きっと、オカシナ村のサトミがちょっといたずらしてるだけなんだ。だから、多分、サトミは自分が大人に見えてるなんて、全然、気付いてないと思うよ」
「へぇ～」
そうだったんです。あれは、サトミお姉ちゃんのいたずらなんです。
だったら、もう、びっくりなんてしません。だって、いつまでもびっくりしていたら、ちょっとくやしいじゃないですか。
「で、でも…ね。…恐くない？」
びくびくしながら、ターくんが下でささやいています。
あの、男の子みたいなサトミが、そのまま大きくなってしまったんです。きっと、とてもケンカが強くなって…今よりも、もっともっと乱暴になっていると思うのです。
そんなターくんの言葉に、ユウタは思わず噴き出してしまいました。
「そうかも知れないな」
笑いながら、フェンスを乗り越えてブロック塀の上に立ちます。そして、そのままユウタは、カズくんのお家のお庭に飛び降りました。
「あのサトミの事だから、ものすごぉ～く、恐くなってるぞ、きっと」

「どうして、ボクが恐いのよ！」
ちっちゃな声で話したつもりなのに…門の方に回ってきたサトミには、ちゃぁんと聞こえてしまったみたいです。
ユウタは小さな二人ににやっと笑ってみせると、声の方に走って行きました。
「気にするな、って。
待たせて、ごめん。ほら、帰ろうか」
そこにいたのは、いつもどおりの小学生のサトミです。
そのサトミは、ぷくっとふくれて、横を向いてしまっています…
でも、ターくんが追いついて、みんなでカズくんにさようならを言う時には、その頬にも優しい笑みが浮かんでいました。

…とっても静かな夕焼け空です。
その茜色の穏やかな光の中を、ユウタとサトミは、ターくんと一緒に並んで帰っていきました……

……

……ほら、…ユウタくんが、小屋の中から出てきます……
ボクに気付いてくれて……茜色の透明な光を浴びながら、大きく手を振って叫んでくれます……
「ちょっと待ってろよ！　すぐ、そっちに行くからな！」
（うんっ！）
小さなユウタくんが、フェンスを登り始めています。…何度見ていても、落ちてケガをしないか心配で…ドキドキしてしまいます。
…無事にブロック塀の上に立ったユウタくんを見て、安心して…
…ボクは、思わず泣きそうになっていました……
今までちっとも動こうとしなかった足で、カズくんのお家の門まで走って行きます。
…ユウタくんが…家の脇を抜けて、駆けてきてくれます……

元気で優しい、小さなユウタくんが…

……その時、ボクに叫んでくれたんです……

「待たせて、ごめん。ほら、帰ろうか」

本当に……《本当》に、そう言ってくれるんです…

…すぐ、目の前で…にっこりと微笑みながら……

……そう言ってくれるんです……

ボクは…ボクは……

涙が、ポロポロと溢れてきます……

…ボクは…ボクは……えぇ、そうです…

……ボクは、ずっと、待っていたんです……

……《本当》に、ずっと……

「さぁ、行こう」

しゃくりあげて何も言えないボクに…小さな手を伸ばしてくれるんです……

…ずっと…ずっと、待っていたその手に……

……ボクは、想いのままに縋り付いてしまいました……

…ユウタくんは、しばらくしてから、そっと優しくボクを引っ張ってくれました。

……えぇ、…もう、ボクは足を止めたりしませんでした……

……もう、決めたんです。…いいえ、そんな事、ずっと前から決まっていたんです。

……とっても静かな空の下で、ふわっ…と虫達の歌声が沸き起こってきます…

ボクの指先をしっかりと握り締めながら…小さな手は、ボクを……

…えぇ…ボクを《お家》まで連れ帰ってくれました……

……そうです…連れ帰ってくれたんです……

…雄太さんの所へ、と……

『オカシナ村の好きな夢』おわり

掌編　手紙　／　詩

おい、サトミ。教習所の試験、合格したんだってな。

「何よ、これ」

手紙の書き出しがこんな言葉だなんて、ひどいと思いませんか？

高校を卒業してから、一度も逢ってないのに…「元気ですか？」とか「今、どうしていますか？」とか…少しくらい、気にしてくれてもいいと思うのです。

ちょっぴり口を尖らせながら、サトミは懐かしい幼なじみの字を読み進めました。

お前が運転すると怖いから、絶対、誰も隣に乗せるなよ。

どうせ、あちこちに車をぶつけたり、恐ろしいくらいにスピードを出したりするだろうからな。

もうっ！　本当に、憎らしいったらありません。手紙でなかったら、文句の一つや二つ、三つや四つ、五つや六つ…いいえ、もっともっと、言ってやりたいところです。

これ以上、読まないでおきましょうか…

…でも…いいえ。サトミの目は、素直に続きを追っていました。

それにしても、正直言って、サトミが車の免許を取るなんて思わなかったよ。すごいじゃないか。これでまた、『自分』にとって

の新しい『何か』が増えたんだし、『サトミ』自身も大きくなった

だろうから…とりあえず、おめでとう、ってところかな。

そうそう。サイドブレーキを入れ忘れるのは、本当にやめろ

よ。
キーを回した途端に動き出して、自分の子どもを圧死させた母親もいるんだから…
サトミ、車が「いとも簡単に人を殺せる物」だってこと、忘れるなよ。
非常に殺傷能力の高い道具…それが車なんだ。乗っている本人にその意識がない分、拳銃よりも恐いかも知れない……
……と、これだけ脅かしておけば、暢気なサトミだって少しは気を付けるよな？
まっ、注意して使えば、こんなに便利で楽しい道具もないし…道具の価値なんて、使う人間次第なんだよ。きっと、サトミの運転する車は、「サトミらしい車」になるんだろうな。
最後の筆記試験も、頑張れよ。
じゃぁな。

ユウタくんの手紙は、これで終わっています。久し振りの手紙なのに、もっと書くことはないのでしょうか。
サトミは不満で仕方ありません。
でも……ユウタくんが本当に書きたかったことは、もっと短かったのかも知れません…

最後の筆記試験も、頑張れよ。

きっと、これだけなのでしょうから……
…サトミには、それがよく分かっていました。
「ほんと、素直じゃないんだから」
そんなことを呟きながら、きちんと手紙を折り畳んでいます。
免許を取ったら、すぐにこの手紙をケースに入れるつもりです。
…サトミにとって、この手紙くらい、効き目のあるお守りはないのですから……

おわり

アルバムの中の　小さな写真
色褪せた　夢の滴
…想い出を映す　柔らかな光の泉……

白い帽子を　両手で押さえ
はにかんで笑う　小さな女の子
夏の空に煌く　眩い笑顔

お母さんが　小さな女の子だった頃
懐かしくて　遠い《時》
永遠に届かない　密やかな憧れ…

長い髪を　そよ風に揺らし
胸元で手を振る　小さな女の子
淡い茜に染まる　可愛い笑顔

お母さんが　小さな女の子だった頃

変わらない　同じ《時》
輝きに満ちる　温かな囁き…

アルバムの中の　小さな写真
仕舞い込まれた　想いの欠けら

…《真》を映す　静かな夢の瞬き……

『オカシナ村の好きな夢』　おわり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4765c/

オカシナ村の好きな夢

2010年10月17日03時52分発行